

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月26日
【事業年度】	第82期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	ニチハ株式会社
【英訳名】	N I C H I H A C O R P O R A T I O N
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 山中 龍夫
【本店の所在の場所】	愛知県名古屋市港区汐止町12番地
【電話番号】	(052)381-2811(代表)
【事務連絡者氏名】	該当ありません。 (同所は登記上の本店の所在地であり、本店業務は下記で行っており ます。)
【最寄りの連絡場所】	愛知県名古屋市中区錦二丁目18番19号(三井住友銀行名古屋ビル)
【電話番号】	(052)220-5111(代表)
【事務連絡者氏名】	取締役 専務執行役員 殿井 一史
【縦覧に供する場所】	ニチハ株式会社東京支店 (東京都中央区日本橋本町一丁目6番5号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第78期	第79期	第80期	第81期	第82期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (百万円)	106,730	111,324	118,215	116,144	119,160
経常利益 (百万円)	7,421	8,212	13,117	13,796	13,137
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	4,878	5,373	9,594	11,151	9,915
包括利益 (百万円)	6,787	4,477	9,662	11,853	9,160
純資産額 (百万円)	59,008	62,413	70,777	80,497	87,404
総資産額 (百万円)	114,918	115,374	126,470	129,605	136,068
1株当たり純資産額 (円)	1,615.86	1,705.84	1,929.85	2,189.71	2,374.08
1株当たり当期純利益 (円)	132.24	145.45	259.52	301.60	268.13
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	131.86	145.18	259.04	301.01	267.61
自己資本比率 (%)	51.9	54.6	56.4	62.5	64.5
自己資本利益率 (%)	8.6	8.8	14.3	14.6	11.8
株価収益率 (倍)	10.6	11.7	12.6	13.5	11.4
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	8,571	10,827	18,411	11,103	12,973
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	4,001	4,114	5,397	5,700	3,595
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	4,732	5,533	3,251	4,350	4,553
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	16,025	17,218	26,854	27,786	32,525
従業員数 (名)	2,852	2,749	2,800	2,842	2,890

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第78期	第79期	第80期	第81期	第82期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	(百万円)	91,807	94,205	99,004	97,357	100,121
経常利益	(百万円)	4,816	4,558	7,163	7,862	7,581
当期純利益	(百万円)	3,348	3,587	5,024	5,386	5,406
資本金	(百万円)	8,136	8,136	8,136	8,136	8,136
発行済株式総数	(千株)	37,324	37,324	37,324	37,324	37,324
純資産額	(百万円)	47,226	49,586	53,660	57,463	60,218
総資産額	(百万円)	102,392	103,215	109,171	109,856	113,606
1株当たり純資産額	(円)	1,277.48	1,340.21	1,449.33	1,551.35	1,625.25
1株当たり配当額	(円)	27.00	30.00	52.00	61.00	56.00
(うち1株当たり中間配当額)		(12.50)	(15.00)	(21.00)	(27.50)	(28.00)
1株当たり当期純利益	(円)	90.77	97.10	135.90	145.68	146.20
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	(円)	90.51	96.92	135.65	145.39	145.91
自己資本比率	(%)	46.0	48.0	49.1	52.2	52.9
自己資本利益率	(%)	7.3	7.4	9.7	9.7	9.2
株価収益率	(倍)	15.5	17.5	24.1	27.9	20.9
配当性向	(%)	29.7	30.9	38.3	41.9	38.3
従業員数	(名)	1,334	1,321	1,258	1,251	1,275
株主総利回り	(%)	120.6	148.3	284.7	356.8	276.0
(比較指標：配当込みTOPIX)	(%)	(130.7)	(116.5)	(133.7)	(154.9)	(147.1)
最高株価	(円)	1,478	1,962	3,430	5,110	4,785
最低株価	(円)	890	1,295	1,371	3,120	2,315

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を当事業年度の期首から適用しており、前事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

3. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

2【沿革】

- 1956年6月 木材資源の高度利用を目的として、日本ハードボード工業株式会社を設立。
本店を名古屋市港区木場町に置く。名古屋市港区汐止町に「名古屋工場」建設。
- 1957年5月 本店を名古屋市中区広小路通に移転。
- 1957年8月 ハードボード（硬質繊維板）の生産開始。
- 1958年8月 インシュレーションボード（軟質繊維板）の生産開始。
- 1962年10月 本店を名古屋市港区汐止町に移転。
- 1973年4月 株式額面を500円から50円に変更のため、東京都千代田区大手町所在の日本ハードボード工業株式会社と合併、本店を名古屋市港区汐止町に移転。
- 1974年11月 「モエンサイディングM」（窯業系外装材）の生産開始。
- 1977年4月 自動車内装向成型用マット（繊維板）の生産開始。
- 1981年5月 「モエンサイディングM」の完全無石綿化に成功。
- 1981年10月 「モエンサイディングW」（窯業系外装材）の生産開始。
- 1984年9月 金属系外装材製造「株式会社チューオー」（栃木県鹿沼市）を買収（現・連結子会社）。
- 1984年10月 「ニチハボード加工株式会社」（現名古屋市南区）を設立（現・連結子会社）。
- 1988年4月 商号をニチハ株式会社に変更。
- 1989年10月 住友金属工業株式会社（当時）及び住金鋼材工業株式会社（当時）と共同出資で新会社「住金エフアールシー株式会社」を設立。
- 1989年12月 株式を名古屋証券取引所市場第二部に上場。
- 1990年11月 「いわき工場」を新設し、「モエンエクセラード」（窯業系外装材）の生産開始。
- 1992年7月 「三重ニチハ株式会社」（三重県津市）を設立。
- 1996年9月 名古屋証券取引所の市場第一部銘柄に指定。
- 1996年12月 株式を東京証券取引所の市場第一部に上場。
- 1997年6月 「下関工場」を新設し、「モエンエクセラード」の生産開始。
- 1998年5月 米国に窯業系外装材の販売を目的とした「Nichiha USA, Inc.」を設立（現・連結子会社）。
- 2001年10月 三井木材工業株式会社（現「ニチハマテックス株式会社」、現名古屋市中区）を株式交換により完全子会社化（現・連結子会社）。
- 2004年3月 「住金エフアールシー株式会社」を株式の追加取得により完全子会社化し、商号を「ニチハFRC株式会社」に変更。
- 2004年7月 ハードボード（硬質繊維板）の生産をニチハマテックス株式会社大江工場（名古屋市南区）へ完全集約。
- 2004年8月 「高萩ニチハ株式会社」（名古屋市中区、工場・茨城県高萩市）を設立（現・連結子会社）。
- 2004年10月 大建工業株式会社との間で窯業系外装材事業の譲受及びインシュレーションボード（軟質繊維板）事業の譲渡に係る事業交換を実施。
- 2004年12月 中国に窯業系外装材の生産を目的とした「ニチハ装飾建材（嘉興）有限公司」を設立（現・連結子会社）。
- 2005年1月 中国に窯業系外装材の生産を目的とした「ニチハ装飾繊維セメント壁板（嘉興）有限公司」を設立（現・連結子会社）。
- 「八代ニチハ株式会社」（熊本県八代市）を設立（現・連結子会社）。
- 2005年2月 住友林業株式会社と共同出資にて「ニチハ富士テック株式会社」（静岡県富士市）を設立（現・連結子会社）。
- 2005年4月 住友林業クレスト株式会社の窯業建材事業をニチハ富士テック株式会社にて継承。
- 2007年10月 米国子会社「Nichiha USA, Inc.」がジョージア州メーコン市に工場を新設し、窯業系外装材の生産を開始。
- 2008年3月 「株式会社チューオー」を株式の追加取得により完全子会社化。
- 2009年3月 松本建工株式会社からの事業一部譲受けを目的として「株式会社F Pコーポレーション」（札幌市東区）を設立（現・連結子会社）。
- 2009年4月 「ニチハマテックス株式会社」が「ニチハFRC株式会社」を吸収合併。
- 2009年5月 「株式会社F Pコーポレーション」が松本建工株式会社から事業一部譲受け。
- 2013年7月 「株式会社チューオー」の金属系外装材販売事業を当社へ統合。
- 2016年4月 「ニチハボード加工株式会社」が「三重ニチハ株式会社」及び「株式会社ニチハコンポーネント」を吸収合併。「ニチハエンジニアリング株式会社」が「株式会社エイト」を吸収合併。
- 2019年1月 ロシア（モスクワ市）に「NICHIBA RUS LLC」を設立（現・連結子会社）。

3【事業の内容】

当社グループは、当社及び子会社14社より構成されており、外装材事業の分野における製品の製造販売を主な事業内容としているほか、繊維板事業、工事業、F P事業、その他事業を展開しております。

当社グループの各事業における当社及び関係会社の位置付け等は次のとおりであります。

なお、次の5部門は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

外装材事業.....国内では、当社が窯業系外装材を製造販売するほか、子会社二チハマテックス(株)、子会社高萩二チ八(株)、子会社八代二チ八(株)及び子会社二チ八富士テック(株)が製造する窯業系外装材のほとんどを当社で仕入れて販売しております。また、子会社(株)チューオーが製造する金属系外装材・外装用付属部材のほとんどを当社で仕入れて販売しております。さらに、窯業系外壁材の部材への加工については、子会社二チハボード加工(株)に委託しております。海外では、子会社Nichiha USA, Inc.が米国において窯業系外装材の製造販売を行うとともに、当社製品の販売をしております。また、中国においては、子会社二チ八裝飾建材(嘉興)有限公司及び子会社二チ八裝飾纖維セメント壁板(嘉興)有限公司が窯業系外装材を製造し、その大半を当社及び米国子会社で仕入れて販売する一方で、子会社二チ八裝飾纖維セメント壁板(嘉興)有限公司は、同社製品及び当社製品を現地に於て販売しております。さらに、ロシアにおいては、子会社NICHIIHA RUS LLCが当社製品の販売を予定しております。

繊維板事業.....子会社二チハマテックス(株)が繊維板を製造し、そのほとんどを当社が仕入れて販売しております。

工事業.....子会社外装テックアメニティ(株)は、主として当社製品を使用した外装工事を行っております。また、子会社(株)F Pホームは、注文住宅販売及び住宅リフォームを行っております。

F P事業.....子会社(株)F Pコーポレーションは、ウレタン断熱パネルの製造販売をしております。

その他事業.....子会社二チ八エンジニアリング(株)は、当社グループの製造事業に関連する営繕・清掃・産廃業務等を行っております。

関係会社は次のとおりであります。

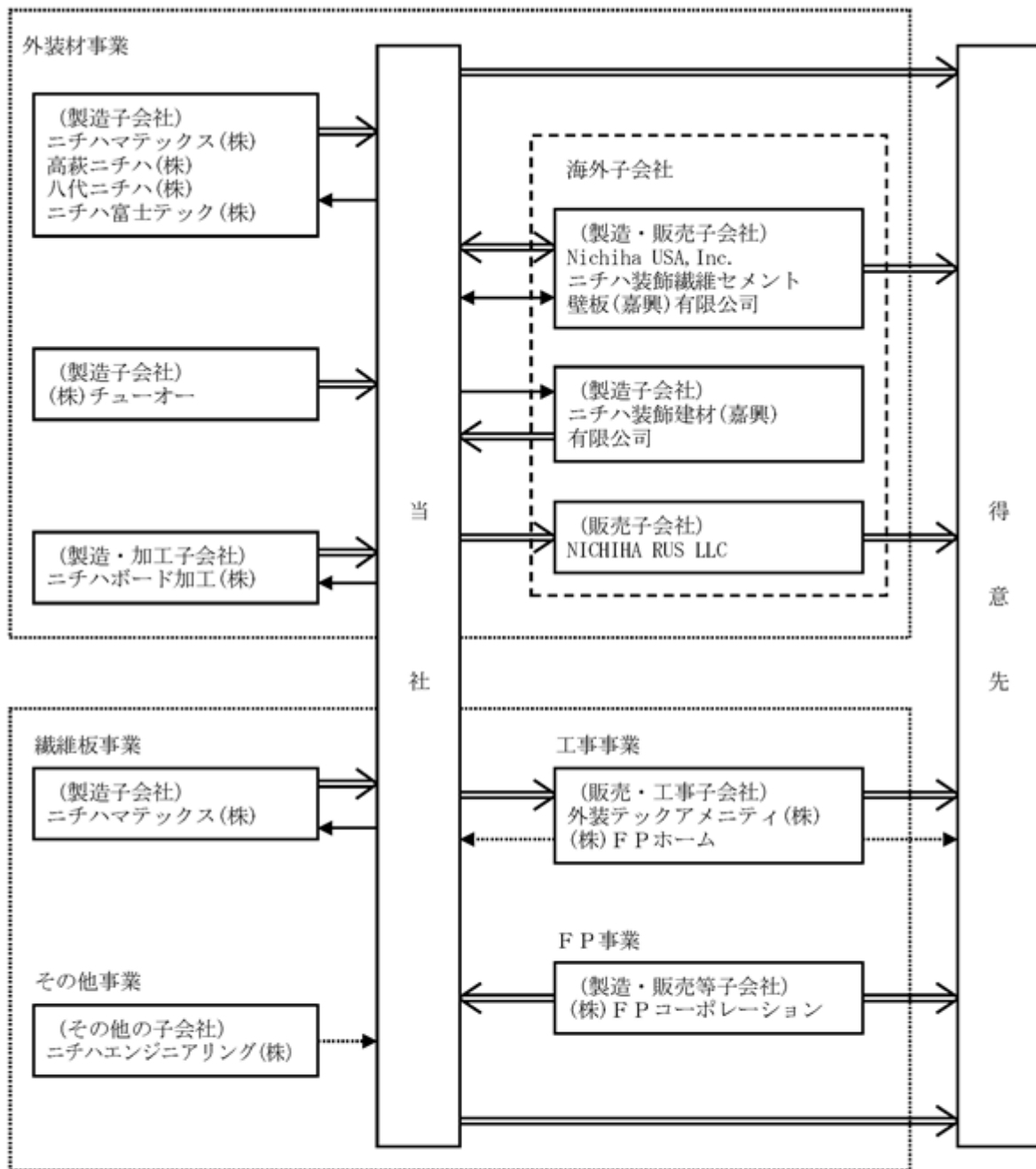
連結子会社

二チハマテックス(株)	: 外装材・繊維板の製造
高萩二チ八(株)	: 外装材の製造
八代二チ八(株)	: 外装材の製造
二チ八富士テック(株)	: 外装材の製造
(株)チューオー	: 外装材・外装用付属部材の製造
二チハボード加工(株)	: 外装材の製造及び加工
外装テックアメニティ(株)	: 住宅の外装工事
二チ八エンジニアリング(株)	: 設備の補修・営繕及び周辺業務
(株)F Pコーポレーション	: ウレタン断熱パネルの製造販売
(株)F Pホーム	: 注文住宅販売及び住宅リフォーム
Nichiha USA, Inc.	: 外装材の製造販売
二チ八裝飾建材(嘉興)有限公司	: 外装材の製造
二チ八裝飾纖維セメント壁板(嘉興)有限公司	: 外装材の製造販売
NICHIIHA RUS LLC	: 外装材の販売

(注) (株)F Pホームは、2019年4月1日付にて(株)F Pコーポレーションに吸収合併されております。

(事業系統図)

事業の系統図は次のとおりであります。



(凡例)

- ⇒⇒⇒ 製品等の流れ
- ⇒ 仕掛品・原材料等の流れ
- ⇒⇒⇒ サービス等の流れ

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ニチハマテックス(株) (注)2	名古屋市中区	2,964	外装材事業 繊維板事業	100.00	製品の購入並びに土地、建物の賃貸借 役員兼任4名 (内当社従業員1名) 資金の貸付
高萩ニチハ(株) (注)2	名古屋市中区	400	外装材事業	100.00	製品の購入及び建物の賃借 役員兼任3名 (内当社従業員1名) 資金の借入
八代ニチハ(株)	熊本県八代市	90	外装材事業	100.00	製品の購入及び生産設備の貸与 役員兼任3名 (内当社従業員3名) 資金の貸付
ニチハ富士テック(株)	静岡県富士市	200	外装材事業	64.98	製品の購入 役員兼任3名 (内当社従業員3名) 資金の貸付
(株)チューオー (注)2	栃木県鹿沼市	180	外装材事業	100.00	金属系外装材及び外装用付属部材の購入及び建物の賃借 役員兼任2名
ニチハボード加工(株)	名古屋市中区	90	外装材事業	100.00	製品の購入及び当社製品の加工並びに土地の賃貸 役員兼任2名 (内当社従業員1名) 資金の借入
外装テックアメニティ(株)	東京都大田区	99	工事事業	100.00	当社製品の販売及び工事施工並びに建物の賃貸 役員兼任2名 (内当社従業員1名) 資金の借入
ニチハエンジニアリング(株)	名古屋市中区	10	その他事業	100.00	営繕業務、周辺業務等サービスの購入及びデザイン、型板の購入並びに土地、建物の賃貸 役員兼任3名 (内当社従業員3名) 資金の借入
(株)F Pコーポレーション	札幌市東区	400	F P 事業	100.00	製品の購入及び建物の賃貸借 役員兼任5名 (内当社従業員3名) 資金の貸付及び債務保証
(株)F Pホーム	札幌市東区	200	工事事業	100.00 (100.00)	役員兼任4名 (内当社従業員3名)
Nichiha USA, Inc. (注)2	米国 ジョージア州	200,000 千米ドル	外装材事業	99.42	当社製品の販売 役員兼任4名 資金の貸付及び債務保証

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
二子八装飾建材(嘉興)有限公司	中国浙江省	5,500 千円ドル	外装材事業	100.00	製品の購入 役員兼任5名 (内当社従業員1名)
二子八装飾繊維セメント壁板(嘉興)有限公司 (注)2	中国浙江省	25,000 千円ドル	外装材事業	100.00	製品の購入及び当社製品の販売 役員兼任4名
NICHIHA RUS LLC	ロシア モスクワ市	5,000 千ルーブル	外装材事業	100.00	当社製品の販売 役員兼任3名 (内当社従業員1名)

(注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。

2. 特定子会社に該当しております。

3. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。

4. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。

5. 「関係内容」欄における役員兼任の当社役員には執行役員を含んでおります。

6. Nichiha USA, Inc.については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	14,981百万円
	(2) 経常利益	2,040百万円
	(3) 当期純利益	2,198百万円
	(4) 純資産額	12,201百万円
	(5) 総資産額	16,903百万円

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(2019年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(名)
外装材事業	2,454
その他	366
全社(共通)	70
合計	2,890

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。
 2. 臨時従業員数は、従業員数の100分の10未満であるため記載を省略しております。
 3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

(2019年3月31日現在)

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,275	44.2	16.5	6,969

セグメントの名称	従業員数(名)
外装材事業	1,195
その他	10
全社(共通)	70
合計	1,275

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。
 2. 臨時従業員数は、従業員数の100分の10未満であるため記載を省略しております。
 3. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
 4. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

当社にはニチ八労働組合が組織されており、2019年3月31日現在の組合員数は1,003名であります。また、連結子会社の一部において労働組合が組織されております。

なお、労使関係について特に記載すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは「素晴らしい人間環境づくり」のスローガンのもと、「お客様本位の姿勢」「創意開発」を経営の基本理念として、株主・取引先・社員など当社グループを支えていただいている全ての関係者の信頼と期待に応え、共に栄えることを日々の経営活動の指針としております。

(2) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

経営指標として当社グループは、自己資本当期純利益率（ROE）を重視しております。販売拡大並びにコストの削減及び品質強化などに伴う利益の最大化を図ることにより、中期経営計画（2018年4月～2021年3月）においてROE12%以上を中期的な目標としております。

当連結会計年度においては、ROE11.8%の実績となりました。今後も引き続き、持続的な企業成長と中長期的な企業価値の向上に努めてまいります。また、健全な財務体質を維持するため、適正な自己資本の充実を図る方針であります。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社グループは、国内外の政治・経済情勢や市場の変化を注視し、中長期的な人口減少に伴う戸建住宅市場の縮小という問題を克服すべく、中期経営計画（2018年4月～2021年3月）に基づき、重点課題である「シェアアップ」、「コストダウン」、「ニューマーケットの開拓」に一層注力し、安定的に利益を創出できる企業体質への変革を進めてまいります。

具体的には、まず「シェアアップ」につきましては、生産効率改善にかかる各種施策の徹底により生産・供給体制の強化を図るとともに、窯業系サイディングで業界初となる塗膜30年保証の新シリーズをはじめ、高付加価値商品の拡販により、さらなるシェア拡大に繋げてまいります。

次に「コストダウン」につきましては、業務効率化に向けたシステム投資などの合理化投資を推進するとともに、ITを活用した生産や品質に関わる業務効率化に積極的に取り組み、さらなる経費の圧縮に努めていく所存です。

そして「ニューマーケットの開拓」につきましては、米国における市場開拓を一段と強化するため新工場の建設を進めており、供給能力の増強と現地ニーズに即した製品のタイムリーな開発により、業績拡大に繋げてまいります。また、昨年5月、オーストラリアにおいて耐火に関する性能試験に合格しましたが、この耐火性能の優位性をアピールし、米国以外の成長が見込まれる有望市場における新規開拓にも注力してまいります。一方、国内においては、中高層建築物対応の新工法採用に向けた提案営業を一層強化するなど、非住宅市場の開拓に傾注してまいります。

当社グループといたしましては、これらの施策を引き続き強力に推進し、持続的な成長を可能とする態勢をより一層強化してまいります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 住宅着工の動向が業績に影響を及ぼすことについて

主力製品である窯業系外装材を始め、当社グループの製品はその多くが国内住宅産業向けであるため、当社グループの業績は住宅着工戸数の動向に影響を受けます。新設住宅着工戸数については、わが国の少子高齢化や人口減少などの構造的要因により、中長期的には減少が避けられない状況にあります。当社グループとしては、従前より海外市場への進出や店舗・公共施設などの非住宅市場開拓にも注力しており、最近では中高層の商業施設市場へ参入するなどリスク分散を図っておりますが、国内新築住宅向け市場規模の占める割合は大きく、その動向に影響を受けることとなります。

特に窯業系外装材は、主に木造及び鉄骨造の建築物に使用されるため、戸建及び低層アパートの新設着工戸数と相関関係が認められます。従って、同着工戸数が窯業系外装材業界全体の出荷量の先行指標でもあり、当社グループの業績もその動向に大きく影響を受けることとなります。

(2) 景気動向と競合等について

住宅関連業界では厳しい企業間競争が続く中、窯業系外装材業界は過去に提携・再編・統合などの動きがありました。最近はこれら業界再編の動きは一段落しておりますが、販売価格については今後も一部で企業間での価格競争が発生する可能性もあり、価格競争にさらされるリスクがあります。

当社グループといたしましては、業界トップ企業として今後も商品力を背景に価格をリードする意向であり、高付加価値品を中心とする高級品化への移行を推進するとともに、一層のコストダウン・合理化に努め対応していく方針ですが、価格低下が進めば今後の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 原材料・エネルギー価格等の変動について

当社グループの製品製造における原材料・エネルギーは、その多くは塗料を始めとする原油からの生成品・セメント・パルプなどから構成されております。近年、これら諸資材の価格が短期間に大きく変動する傾向にあり、この傾向は今後も続くことが考えられ、従前のように比較的安価な材料等を安定的に調達できなくなるリスクがあります。

当社グループでは対策として、調達先の多様化や一括調達の検討、あるいは材料配合の見直しなど様々な合理化策を講じる一方で、次期の業績予想においても、一定の前提の下、資材価格の変動の影響を織り込むなどしておりますが、諸資材の価格が予想を上回ったり、販売価格への転嫁が困難な場合や転嫁時期が遅れた場合には当社グループの業績に悪影響が及ぶ可能性があります。

(4) 製品の欠陥及び製造物責任について

当社グループは、従来より製造業の原点として製品の品質管理を徹底しておりますが、すべての製品について欠陥が無く、将来的にもクレームが発生しないという保証はありません。また、製造物責任賠償については保険に加入しておりますが、この保険が最終的に負担する賠償額を十分にカバーできるという保証はありません。

大規模なクレームや製造物責任賠償につながるような製品の欠陥が生じれば、多額の費用を要するのはもちろん、当社グループの製品に対する信頼性を損ない、それにより売上額が低下し、当社グループの業績及び財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

(5) 海外市場での新規事業について

当社グループは、海外事業を「次の成長エンジンの一つ」に位置付けております。元来、大きな戸建住宅需要を有する米国については、主として現地工場にて生産した窯業系外装材を住宅市場向けに販売する事業を展開しております。米国住宅市場は堅調に推移しており、今後は現地工場における安定生産体制を確立し、さらなる増産や高付加価値品の生産に取り組み、米国事業の拡大を図ります。この一環として、2018年7月には高付加価値品を生産する新工場建設を決定しました。本工場は総額約150億円を投じて、日本で生産しているものと同等の高付加価値品を生産できる工場です。この工場建設によって、供給余力を確保するとともに、現地顧客ニーズに寄り添った製品の開発とタイムリ - な上市が可能となります。

また、市場としての可能性を有する中国市場については、浙江省にある生産子会社2社が窯業系外装材を製造・加工しており、その大半を当社及び米国子会社に供給しているほか、一部は中国国内でも販売しております。

海外進出に際しては、海外市場での成長の機会に乗り遅れないために、収益の計上が見込まれる時期より相当以前から多額の投資を行う必要が生じます。このような立ち上がり期の投資額の増大によって、利益を上回る費用が必要となることがあります。さらに、海外における事業展開には、市場開放の問題、予期しない法律又は諸規制の変更、不利な税制や政治的・経済的要因など様々なリスクが内在すると考えられ、それら要因が障壁となり、当社グループの事業成長が妨げられる可能性があります。

海外における事業活動の結果は、当社グループの業績及び財政状態に大きな影響を及ぼす可能性があります。

(6) 為替変動の影響について

当社グループの業績及び財政状態は、為替相場の変動によって影響を受けます。為替の変動は、当社及び在外子会社間の外貨建取引における資産・負債、収益・費用及びキャッシュ・フローに影響する場合、連結財務諸表における在外連結子会社の資産・負債、収益・費用の円貨への換算額に影響する場合の二つの側面において影響を及ぼします。

当社グループは、為替予約などの方法により為替相場の変動リスクを限定的にとどめるための手段を講じておりますが、ヘッジ会計を適用していない在外子会社への外貨建貸付金の時価評価に伴う円貨への換算を始めとして、これらの為替変動は当社グループの業績及び財政状態に重要な影響を及ぼすことがあります。

(7) 東南海地震を始めとする震災等の影響について

2011年3月11日に発生した東日本大震災後、国内では大地震に対するリスク認識が強まっており、かかる状況下、報道等によれば、東南海地震等の大地震が近い将来に発生する可能性が高いことが改めて指摘されております。当社グループでは、東南海地震が発生した際に「震度6弱」の揺れが予測される地域内に、当社名古屋工場、ニチハマテックス株式会社衣浦工場・大江工場等が存在します。

当社グループは、将来予想される大地震の発生に備え、人的被害対応の訓練を実施するほか、建物の補強工事を行うなどの対策を講じております。また、万一被災した場合にあっても、一日も早く通常の生産体制に復旧することが出来るよう原材料等の供給体制を見直すなどの対策を計画しておりますが、それらの対応には限界もありません。ひとたび大地震が発生すれば、当社グループの生産設備等に重大な影響を及ぼすことが想定され、一時的に生産活動が停止する可能性があるとともに、一方では、国内における経済活動の停滞に伴う消費動向の悪化により、当社グループの業績にマイナス影響が生じる可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、設備投資は堅調に推移したものの、鉱工業生産は海外経済の減速に伴う輸出の低迷などから弱含み、個人消費は緩やかな持ち直しにとどまるなど、景気は緩やかな回復基調で推移する一方で一部に弱さも見られました。

住宅産業におきましては、新設住宅着工戸数は貸家の減少傾向が続いたものの、持家及び分譲住宅が下半期に入って増加したため、2018年度の全体の新設住宅着工戸数は953千戸と前年度比0.7%、特に当社グループ事業との関係が強い戸建住宅に限れば同2.8%の増加となり、市場は回復基調で推移しました。

一方、当社グループの主力製品である窯業系外装材の2018年度における業界全体の国内販売数量は、2018年度下半期では前年同期比0.5%の増加と回復傾向にあるものの、貸家向けの減少に加え、戸建住宅着工との数カ月のタイムラグもあり、前年度比1.7%（JIS規格対象外の12mm厚製品を含む基準）の減少となりました。

このような市場環境の下、当社グループは、引き続き耐候性等に優れた新世代外装材「Fu-ge（フュージェ）」などの顧客ニーズに沿った高付加価値商品の拡販を図るとともに、窯業系サイディングとしては業界初となる塗膜30年保証に対応した新商品を投入するなど、メンテナンスコスト面での優位性をアピールしました。また、非住宅市場向けの営業施策の強化や、成長を続けている米国を始めとする海外マーケットのさらなる開拓に努める一方、各種合理化や生産性向上によるコスト削減にも注力いたしました。

この結果、当社グループの当連結会計年度の連結業績は次のとおりとなりました。

（金額単位：百万円）

	前連結会計年度	当連結会計年度	増減	
			金額	率（%）
売上高	116,144	119,160	3,015	2.6
営業利益	13,232	12,720	511	3.9
経常利益	13,796	13,137	659	4.8
親会社株主に帰属する当期純利益	11,151	9,915	1,235	11.1

売上高につきましては、主力の国内事業は業界全体の落ち込みを高付加価値商品を中心としたシェアアップで吸収して増収となったほか、米国窯業系外装材事業は引き続き堅調に推移し増収となったことから、全体の売上高は1,191億60百万円と前連結会計年度比30億15百万円（2.6%）の増収となりました。

一方で損益につきましては、国内におけるエネルギーや物流のコストのアップに加え、米国窯業系外装材事業での営業体制強化に伴う先行費用の発生などにより減益となったことから、営業利益は127億20百万円と前連結会計年度比5億11百万円（3.9%）、経常利益は131億37百万円と同6億59百万円（4.8%）、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度に米国子会社で新たに繰延税金資産を計上した影響もあり、99億15百万円と同12億35百万円（11.1%）の減益となりました。

セグメント別の業績は次のとおりであります。

外装材事業

売上面では、前記のとおり、国内外装材事業・米国窯業系外装材事業のいずれも増収となったことから、売上高は1,096億30百万円と前連結会計年度比29億1百万円（2.7%）の増収となりました。

また、損益面では、国内外装材事業は増益となったものの、米国窯業系外装材事業の減益などにより、セグメント利益（営業利益）は152億56百万円と同7億48百万円（4.7%）の減益となりました。

当連結会計年度末の財政状態は以下のとおりであります。

前連結会計年度末に比し純資産が69億7百万円、総資産が64億63百万円それぞれ増加した結果、自己資本比率は64.5%と2.0ポイントの増加となりました。

増減の主なものは、流動資産では現金及び預金が53億85百万円、受取手形及び売掛金が15億87百万円、商品及び製品が7億22百万円それぞれ増加したことなどにより、流動資産全体で81億93百万円増加しております。また、固定資産では有形固定資産が8億95百万円、投資その他の資産が4億43百万円それぞれ減少するなど、全体では17億29百万円減少しております。

負債では、流動負債が8億28百万円減少した一方で、固定負債が3億85百万円増加したことにより、負債合計は4億43百万円減少しております。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末に比し47億38百万円増加し、当連結会計年度末には325億25百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は129億73百万円（前連結会計年度比18億70百万円の増加）となりました。これは、主に、償却前利益（税金等調整前当期純利益＋減価償却費）で179億19百万円を計上した一方で、売上債権が16億51百万円、たな卸資産が15億16百万円それぞれ増加し、法人税等の支払額が31億48百万円となるなど資金の減少要因もあったことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は35億95百万円（前連結会計年度比21億5百万円の減少）となりました。これは、主に、有形固定資産の取得による支出が29億46百万円（前連結会計年度比25億15百万円減少）あったことによるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は45億53百万円（前連結会計年度比2億3百万円の増加）となりました。これは、主に、長期・短期合わせた借入金を21億34百万円減少させたほか、配当金の支払額が22億74百万円あったことなどによるものであります。

生産、受注及び販売の実績

・生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比(%)
外装材事業(百万円)	94,061	103.1
報告セグメント計(百万円)	94,061	103.1
その他(百万円)	9,212	105.1
合計(百万円)	103,273	103.3

- (注) 1. 金額は販売価格によっており、セグメント間の取引については相殺消去しております。
 2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

・製品商品仕入実績

当連結会計年度における製品商品仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比(%)
外装材事業(百万円)	10,021	97.7
報告セグメント計(百万円)	10,021	97.7
その他(百万円)	897	103.0
合計(百万円)	10,919	98.2

- (注) 1. 金額は販売価格によっており、セグメント間の取引については相殺消去しております。
 2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

・受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高 (百万円)	前年同期比 (%)	受注残高 (百万円)	前年同期比 (%)
その他	733	133.0	199	402.1

- (注) 1. その他における注文住宅、住宅リフォームに係るものであります。なお、上記以外については、主として見込み生産によっており、受注生産はほとんど行っておりません。
 2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

・販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比(%)
外装材事業(百万円)	108,790	102.8
報告セグメント計(百万円)	108,790	102.8
その他(百万円)	10,369	100.8
合計(百万円)	119,160	102.6

- (注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。
 2. 最近2連結会計年度における主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
SMB建材(株)	30,777	26.5	31,212	26.2
住友林業(株)	26,708	23.0	27,135	22.8
伊藤忠建材(株)	12,581	10.8	13,875	11.6

3. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。
なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。当社グループの連結財務諸表の作成にあたりましては、たな卸資産、繰延税金資産、製品保証引当金、退職給付引当金につき、過去の実績や状況に応じ、合理的と考えられる様々な要因に基づき見積り及び判断を行い、その結果を基礎として金額を算出し計上しております。実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表の作成において使用される重要な判断と見積りに、特に影響を及ぼす重要な会計方針は、次のとおりであります。

・ たな卸資産

当社及び連結子会社は総平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）又は移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）により評価しており、在庫の経過期間、市場価値に基づく時価の見積額と原価との差額について評価減を計上しております。将来における実際の需要、市場価値が当社グループの見積りより悪化した場合には、追加の評価減が必要となる可能性があります。

・ 繰延税金資産

繰延税金資産については、確実な将来回収可能性に基づき計上しております。回収可能性を判断するに際し、将来の課税所得を慎重に見積もり、実現可能性の高い継続的な税務計画を作成検討し、回収可能性が低いと考えられるものについては評価性引当額を計上しております。繰延税金資産の全部又は一部について、将来実現不可能と判断した場合は、当該判断を行った期間に繰延税金資産の調整額を法人税等調整額として税金費用を計上します。同様に、計上額の純額を上回る繰延税金資産を今後実現可能と判断した場合には、繰延税金資産の調整額を法人税等調整額として当該判断を行った期間において税金費用を減額させることとなります。

・ 製品保証引当金

当社及び一部の連結子会社は、製品保証引当金として製品に関する保証費発生見積額を計上しております。当該会社の保証費発生見積額は、過去の発生実績率に基づいて計算した額に発生した製品保証費用の実情を考慮して計上しておりますが、実際の発生実績率又は製品保証費用が見積りと異なる場合、保証費発生見積額の修正が必要となる可能性があります。

・ 退職給付に係る負債

従業員の退職給付費用及び債務は、数理計算上で設定される前提条件に基づいて算出されております。これらの前提条件には、割引率、将来の給与水準、退職率、直近の統計数値に基づいて算出される死亡率及び年金資産の長期期待運用収益率などが含まれます。当社及び国内子会社の年金制度においては、割引率は退職給付の支払見込期間及び支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を使用して算出しております。長期期待運用収益率は、年金資産が投資されている資産の種類ごとの長期期待運用収益率の加重平均に基づいて計算されます。実際の結果が前提条件と異なる場合又は前提条件が変更された場合、当該事業年度においてその影響は退職給付に係る負債の一部として累積され、償却を通じて将来に亘って定期的に認識されるため、一般的には将来期間において認識される退職給付費用に影響を及ぼします。割引率の低下及び年金資産運用での損失は、当社グループの退職給付費用に対して悪影響を及ぼすことになり、その場合には退職給付費用の見積額の追加が必要となる可能性があります。

当連結会計年度の財政状態及び経営成績の分析

当連結会計年度の財政状態及び経営成績につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」の項に記載のとおりであります。

経営成績に重要な影響を与える要因について

「2 事業等のリスク」の項で前述した各リスクが顕在化した場合には、当社グループの業績に影響が及ぶ可能性があります。

また、「固定資産の減損に係る会計基準」の適用に伴い、今後の業績等の内的要因や地価の下落等の外的要因を含め、当社グループが所有する固定資産につき、将来キャッシュ・フローが十分に見込めない資産又は資産グループが存在すると判定された場合には、当社グループの経営成績に重要な影響を及ぼすことがあります。

資本の財源及び資金の流動性についての分析

・キャッシュ・フローの状況

当社グループのキャッシュ・フローの状況については、「(1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」の項に記載のとおりであります。

・資金調達と資金需要

当社グループはメイン銀行をはじめ取引金融機関と良好な関係を維持しております。当連結会計年度には設備投資資金の調達及び長期安定資金の確保のため、30億円の長期借入を行いました。一方、長期借入金の約定返済が進んだことなどから、長期・短期合わせた借入金残高は、前連結会計年度末に比し、21億34百万円減少して161億79百万円となりました。

経営者の問題意識と今後の方針について

経営者の問題意識と今後の方針については、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」に記載のとおりであります。

4【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5【研究開発活動】

当社グループは、「素晴らしい人間環境づくり」のスローガンのもと、循環型社会の実現に貢献する創造開発型企業として、新しい建築材料の可能性を探る基礎研究から高品質・低コストを両立するための生産技術、さらには施工技術の開発に至るまで、時代を先取りする新商品の開発を目指して研究開発活動を行っております。

当社グループにおける研究開発活動は、主として当社並びに子会社(株)チューオー及び子会社(株)F Pコーポレーションが行っております。

当連結会計年度には、当社は中期経営計画の目標である「世界で通用する建物の壁材専門メーカー」を目指し、商品構成の充実を図るとともに、従来にない新タイプの外装材を追求する開発にも積極的に取り組みました。(株)チューオーにおいては金属を素材とする壁と屋根の外装材の総合メーカーを目指して、また、(株)F Pコーポレーションにおいては生産技術面を主体として、それぞれ活発な研究開発活動を展開しております。

なお、当連結会計年度末現在の研究開発人員は107名、当連結会計年度の研究開発費は1,470百万円であります。

当連結会計年度におけるセグメント別の研究開発活動の状況及び研究開発費は次のとおりであります。

(1) 外装材事業

窯業系外装材については、当社独自の技術を活かし、環境負荷低減と住宅性能向上に貢献できる商品開発を基本として、機能や工法においても時代のニーズに応えるべく、様々な商品を開発し発売いたしました。

住宅の長寿命化に貢献するべく、2018年2月に発売いたしました塗膜30年保証に対応した「プラチナコート30」について、次のとおり新商品を投入しラインナップを充実いたしました。2018年7月に四方合いじゃくり商品「Fu-ge(フージェ)」シリーズより18mm厚品「ビレリス」「スプラン」「レイシェイド」「アコルド」の4柄及びモエンエクセラード16シリーズから「マグート」柄を発売、2019年1月には「グランスペック60」シリーズより「無垢板型枠RCウォール16」柄を発売いたしました。

また、新内外壁材「COOL(クール)」シリーズにおいては、「イルミオ」柄に「グラニットホワイト」「ウェーブブラウン」の2色を追加いたしました。そのほか、幅広い市場ニーズの高級化・多様化に併せて「プラチナコート」仕様の「オペリア」「ニューグランドール」各シリーズより、それぞれ新商品を発売いたしました。

加えて、新市場獲得への取り組みとして、2018年7月より鉄筋コンクリート(RC)造について、モエンサイディングの施工高さ制限を45m規模まで拡大可能とした重ね張り工法を開発いたしました。

また、かねてより取り組んでいた端材回収システムに加えて、建築現場で発生する製品端材を大幅に低減する「出荷段階での工場内プレカット(ラフカット)サービス」を開始し、この活動が「持続的な完全循環型リサイクル事業モデル」として高く評価され「2018年度 グッドデザイン賞」を受賞いたしました。

一方、金属系外壁材についても、金属感を全面に出したシャープなラインで流れる葉を表現した「N型カーレンリーフプレミアム」柄を発売、加えて「ST型センターストライプUプレミアム」柄にストライプ調を引き立てる新色「ネイビーブルー」を追加いたしました。ともにフッ素塗装高耐食GLめっき鋼板を使用し、塗膜変褪色10年保証を実現しております。

以上の外装材事業に係る研究開発費は1,453百万円であります。

(2) その他

当社グループは、その他の事業においても研究開発に積極的に取り組んでおります。F P事業においては、2016年度に業界初となる筋交いなしウレタン断熱パネルで2.1倍の壁倍率大臣認定の取得をし、販売をしておりますが、更なる普及を目指すため省施工化を目的とした気密機能付きパネルと、リフォームに特化した専用パネルの開発を行いました。今後も市場の変化に対応すべく、開発を進めております。

以上のその他に係る研究開発費は16百万円であります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、製品競争力向上のための生産設備の増強・更新及び合理化、環境保全並びに事務の合理化などを目的として設備投資等を実施しております。

当連結会計年度の設備投資等につきましては、外装材事業を中心に総額で3,765百万円を実施いたしました。

セグメント別の設備投資について、その概要は次のとおりであります。

外装材事業

外装材事業につきましては、当社において、更新、合理化投資等1,358百万円の設備投資等を行いました。また、チューオーでは、外装用付属部材生産設備の新設を中心に518百万円の投資を行うなど、外装材事業全体では3,375百万円の設備投資を実施いたしました。

所要資金につきましては、自己資金と長期借入金を充當いたしました。

なお、当連結会計年度において、生産能力に重要な影響を与えるような設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

(2019年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
			建物及 び構築 物	機械装 置及び 運搬具	土地 (面積千 m ²)	リース 資産	その他	合計	
本社事務所 (名古屋市中区)	全社	本社管理施設	6	0	-	2	3	12	96
名古屋工場 (名古屋市港区) (注)4	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	1,118	1,821 <0>	2,191 (214.4) [9.1]	1	38 <0>	5,170	381
名古屋西部工場 (愛知県弥富市)	外装材事業	窯業系外装材 加工設備	24	18	538 (14.1)	-	0	582	14
いわき工場 (福島県いわき市)	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	648	1,029	2,965 (232.6)	11	15	4,670	147
下関工場 (山口県下関市)	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	943	502	2,000 (132.8)	-	10	3,455	155
営業所等 (名古屋南区他 33ヵ所) (注)5	外装材事業 その他	販売及び配送 等業務施設	1,479	139	791 (7.2)	16	67	2,495	390
その他 (名古屋市港区他) (注)6	外装材事業 その他 全社	研究開発・ 福利厚生・ 研修施設他	631	31	3,093 (83.3)	214	733 <672>	4,704	92

(2) 国内子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
				建物及 び構築 物	機械装 置及び 運搬具	土地 (面積千 m ²)	リース 資産	その他	合計	
ニチハマテック ス(株) (注)7	本社・衣浦工場 (愛知県半田 市)	外装材事業 その他	本社管理施設及 び窯業系外装材 生産設備	1,204	1,284	216 (90.5)	7	35	2,748	134
ニチハマテック ス(株) (注)7	習志野工場 (千葉県習志野 市)	外装材事業	窯業系外装材生 産設備	591	394	3,727 (55.7)	-	5	4,718	77
ニチハマテック ス(株) (注)7	大江工場 (名古屋市南 区)	その他	繊維板生産設備	322	389	-	-	2	714	68
高萩ニチハ(株) (注)8	高萩工場 (茨城県高萩 市)	外装材事業	窯業系外装材生 産設備	476	568	1,042 (72.0)	-	6	2,094	161
ニチハ富士テッ ク(株)	富士工場他 (静岡県富士市 他)	外装材事業	窯業系外装材及 び外装用付属部 材生産設備他	54	136	681 (42.9)	11	1	886	65
(株)チューオー	本社・鹿沼工場 他 (栃木県鹿沼市 他)	外装材事業	本社管理施設及 び金属系外装 材・外装用付属 部材生産設備他	290	711	499 (39.3)	-	84	1,586	121
ニチハボード加 工(株) (注)9	本社工場他 (名古屋市南区 他)	外装材事業	窯業系外装材生 産・加工設備	537	501	1,149 (38.2)	4	20	2,213	202
(株)FPコーポ レーション (注)10	本社事務所他 (札幌市東区 他)	その他	本社管理施設及 び断熱パネル等 生産設備他	353	1	861 (79.9)	-	0	1,216	126
八代ニチハ(株) 他子会社3社	本社工場他 (熊本県八代市 他)	外装材事業 その他	窯業系外装材生 産設備他	82	88	400 (35.0)	-	9	580	205

(3) 在外子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
				建物及 び構築 物	機械装 置及び 運搬具	土地 (面積千 m ²)	リース 資産	その他	合計	
Nichiha USA, Inc.	本社・メーコン工場 (米国ジョージア 州)	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	2,247	1,898	67 (240.1)	-	197	4,411	283
ニチハ裝飾建材 (嘉興)有限公司	本社工場 (中国浙江省)	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	176	146	- [26.7]	-	3	326	63
ニチハ裝飾纖維セ メント壁板(嘉興) 有限公司	本社工場他 (中国浙江省他)	外装材事業	窯業系外装材 生産設備	945	265	- [100.3]	-	4	1,215	110

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具器具及び備品、建設仮勘定及び投資不動産の合計であります。
なお、上記金額には、消費税等は含まれておりません。
2. 上記中提出会社の〔外書〕は、連結会社以外から賃借している土地の面積(千㎡)であります。また、在外子会社の〔外書〕は土地使用権に係る面積(千㎡)であります。
3. 上記中 内書 は、連結会社以外への賃貸設備であります。
4. 提出会社の名古屋工場の建物及び構築物、土地には連結子会社ニチハエンジニアリング(株)及び同外装テックアメニティ(株)に貸与中の建物及び土地(0.5千㎡)を含んでおります。
5. 提出会社の営業所等の建物及び構築物には連結子会社(株)F Pコーポレーションに貸与中の建物を含んでおります。
6. 提出会社のその他の建物及び構築物、土地には連結子会社ニチハマテックス(株)に貸与中の建物及び土地(37.3千㎡)、同ニチハボード加工(株)に貸与中の土地(26.0千㎡)、同八代ニチハ(株)に貸与中の建物及び機械を含んでおります。
7. 国内子会社のニチハマテックス(株)の衣浦工場、習志野工場及び大江工場の建物及び構築物には、当社及び連結子会社ニチハエンジニアリング(株)、同外装テックアメニティ(株)に貸与中の建物を含んでおります。
8. 国内子会社の高萩ニチハ(株)の建物及び構築物には、当社に貸与中の建物を含んでおります。
9. 国内子会社のニチハボード加工(株)の建物及び構築物には、当社に貸与中の建物を含んでおります。
10. 国内子会社の(株)F Pコーポレーションの建物及び構築物には、当社及び連結子会社(株)F Pホームに貸与中の建物を含んでおります。
11. 現在休止中の主要な設備はありません。

3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資につきましては、生産能力の増強、原価低減及び品質向上等を図るため、今後の需要予測、業界動向、利益に対する投資効率等を総合的に勘案して策定しております。

当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、除却等の計画は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手及び完了予定		完成後の 増加能力
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
Nichiha USA, Inc.	メーコン工場 (米国ジョージア州)	外装材事業	窯業系外装材生 産設備	15,000	53	自己資金 及び借入金	2018年7 月	2020年10 月～2021 年3月	6%程度 増加

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除売却を除き、重要な設備の除売却の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	80,000,000
計	80,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年6月26日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引 業協会名	内容
普通株式	37,324,264	37,324,264	東京証券取引所 (市場第一部) 名古屋証券取引所 (市場第一部)	単元株式数 100株
計	37,324,264	37,324,264		

(注)「提出日現在発行数」には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの新株予約権の権利行使により発行された株式数は含まれておりません。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

ストックオプション制度の内容は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」の(ストック・オプション等関係)に記載しております。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金残 高(百万円)
2001年4月1日~ 2002年3月31日	4,194	37,324	209	8,136	3,872	11,122

(注) 2001年10月1日の三井木材工業株式会社との株式交換(交換比率1:0.12)に伴う増加であります。

(5) 【所有者別状況】

(2019年 3月31日現在)

区分	株式の状況 (1単元の株式数 100株)								単元未満株式 の状況 (株)
	政府及び地 方公共団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)	-	44	23	213	180	4	2,284	2,748	-
所有株式数 (単元)	-	140,847	1,611	113,922	95,624	17	20,893	372,914	32,864
所有株式数の 割合 (%)	-	37.77	0.43	30.55	25.65	0.00	5.60	100	-

- (注) 1 . 自己株式341,495株は、「個人その他」に3,414単元、「単元未満株式の状況」に95株含まれております。
 2 . 「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が、23単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2019年 3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己 株式を除く。) の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海一丁目 8 番11号	2,851	7.71
銀泉株式会社	東京都千代田区九段南三丁目 9 番15号	2,617	7.08
住友林業株式会社	東京都千代田区大手町一丁目 3 番 2 号	2,572	6.96
日本スタートラスト信託銀行株式会社 (信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番 3 号	2,090	5.65
住友商事株式会社	東京都千代田区大手町二丁目 3 番 2 号	1,602	4.33
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内一丁目 1 番 2 号	1,597	4.32
住友生命保険相互会社	東京都中央区築地七丁目18番24号	957	2.59
GOVERNMENT OF NORWAY	BANKPLASSEN 2, 0107 OSLO 1 OSLO 0107 NO	873	2.36
伊藤忠建材株式会社	東京都中央区日本橋本町二丁目 7 番 1 号	830	2.25
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目 4 番 1 号	756	2.04
計		16,749	45.29

- (注) 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)、日本スタートラスト信託銀行株式会社 (信託口) の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数はそれぞれ2,851千株、2,090千株であります。

(7)【議決権の状況】
 【発行済株式】

(2019年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 341,400	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 36,950,000	369,500	-
単元未満株式	普通株式 32,864	-	-
発行済株式総数	37,324,264	-	-
総株主の議決権	-	369,500	-

- (注) 1. 「完全議決権株式(自己株式等)」欄の普通株式は、全て当社保有の自己株式であります。
 2. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が2,300株(議決権の数23個)含まれております。

【自己株式等】

(2019年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
二子八株式会社	名古屋市港区汐止 町12番地	341,400	-	341,400	0.91
計		341,400	-	341,400	0.91

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	468	1,421,040
当期間における取得自己株式	21	66,990

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (注) 1	8,900	8,311,142	-	-
保有自己株式数	341,495	-	341,516	-

(注) 1. 当事業年度の内訳は、新株予約権の行使(株式数8,900株、処分価額の総額8,311,142円)であります。

2. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り・売渡し及び新株予約権(ストック・オプション)の行使による株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社グループの配当政策につきましては、株主各位に対して各期の業績に応じた長期的かつ安定的な利益還元を行うことを基本とするとともに、当社グループの装置産業という属性と将来の事業展開や経営環境の変化への対応を考慮すれば、企業体質強化のための内部留保の充実も必要と考え、配当性向と財務状況とのバランスを勘案しつつ、適正な配当水準を維持することを方針としております。内部留保については、製品の高付加価値化、新市場の開拓などを目的とした研究開発・設備投資に充当していく方針であります。また、業績に応じた利益配分の指標としては、連結配当性向20%以上を指針として運用しております。

なお、当社は中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としておりますが、中間配当額は、年間配当指標を基礎として、中間期業績及び通期業績見通し等を踏まえ決定することとしております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の配当金につきましては、既に実施済の中間配当金28円に加え、期末配当金は、1株につき普通配当28円を実施することを決定いたしました。これにより当期の年間配当金は、1株当たり56円となります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年11月7日 取締役会決議	1,035	28.0
2019年6月25日 定時株主総会決議	1,035	28.0

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社グループは、経営の公正性と透明性の向上及びこれに対する監督機能の充実並びに積極的な情報開示が企業経営にとっての最重要課題であると認識しており、取締役会の活性化、監査役機能の充実、経営状態のタイムリーなディスクロース、投資家向けIR活動の活発化などに注力しております。

また、企業活動において法令遵守、倫理性を確保し、コンプライアンス体制を確立するためには、経営陣自らが経営管理組織及び社内規律を通じ率先垂範してそれらの浸透を図る必要があると考えております。

今後ともコーポレート・ガバナンスについては「経営者自らが透明性を確保し、説明責任を果たしていく姿勢こそが重要」との基本認識の下、さらに如何にその質を高めていくかということを常に念頭に置いて経営に取り組み、開かれた企業として広く企業活動を通じて社会への貢献を目指してまいります。また、コーポレート・ガバナンス・コードの趣旨を適切に理解し、当社に相応しいコーポレート・ガバナンス体制の確立を図ってまいります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

・企業統治の体制の概要

ア．取締役会等

当社は、取締役会機能の充実活用こそが経営にとって最も重要であると考えております。取締役会は毎月1回定例的に開催し、重要案件については必要に応じ臨時取締役会を開催しております。決議を要する事項については、「取締役会規程」とは別に詳細を定めた「取締役会決議事項付議基準」をベースにして重要事項を全て付議しており、この付議基準は職務権限規定ともリンクさせて全社員に公開して、ガラス張りて運用するようにし、さらに、基準に該当しない場合でも「経営情報や各部門の動向を共有化」という観点から必要と思われる事項は幅広く付議又は報告を行って、議論し対策等を検討しております。

また、取締役会は業務執行を監督する機関として、逐次業務執行の状況につき報告を受け、チェックしております。

さらに、取締役の一部を中心に構成される「経営会議」を月1回以上開催し、取締役会と連携して経営上の主要課題につき審議を行っております。

イ．監査体制等

監査体制としては、監査役・内部監査・会計監査人の三様監査の連携と機能強化を目指しており、特に監査役監査においては、監査役の重要情報へのアクセス保証に配慮（常勤監査役には、社内規定で定める重要稟議を全て回議する等）するとともに、子会社監査役とも定期的に意見及び情報交換を行うことによって、当社グループ全体の監査品質の向上に努めております。

なお、監査役監査、内部監査及び会計監査並びに内部統制部門の相互連携については、社内常勤監査役や内部監査室、内部統制部門（総務部・財務部など）が中心となって、随時、意見交換や情報共有等を行うなど、相互に協力することにより各監査の品質向上に努めております。

・企業統治の体制を採用する理由

当社は監査役設置会社形態を採用していますが、これは、当社の事業がほぼ単一業種（売上の90%以上が外装材事業）であり、かつ当社程度の規模では、業務と社内事情に精通した2名の社内監査役と、豊富な経験と知識・識見を持つ3名の社外監査役により、監査は充分機能しており（後述）、これが実効的な形態だと考えるからであります。また、豊富な経験と知識・識見を持つ2名の社外取締役を選任し、経営監督機能の強化にも努めております。

企業統治に関するその他の事項

・内部統制システムの整備の状況

当社では、会社法・会社法施行規則に基づく「内部統制システム構築の基本方針」について、取締役会において次のとおり決議しております。

ア．当社及び子会社の取締役・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

a．当社グループにおけるコンプライアンスを一層推進し、その実効性を上げるため、当社は、取締役会の直結組織として、特定の取締役をコンプライアンス担当役員に選定し、同担当役員が委員長を務める「コンプライアンス推進委員会」を設置する。

また、コンプライアンス関連規定を整備し、「ニチハグループ行動指針」等の全員配付及び教育・研修等により当社グループの役員・使用人への徹底を図る。

- b. コンプライアンス推進委員会は、コンプライアンスへの取組みを当社グループ全体に亘り組織横断的に統括するとともに、コンプライアンス推進に関する各種施策を立案・実施し、コンプライアンス意識の醸成、教育・啓発に努め、コンプライアンス経営の強化を図る。
 - c. 当社の監査役並びに代表取締役社長直轄の内部監査室は、協働あるいは単独で内部統制の有効性の検証を行う。
 - d. 法令違反・社内諸規定違反など不正行為等の早期発見と是正を行うために、内部通報制度「ニチハグループ・コンプライアンス・ホットライン」を導入して、内部監査室及び弁護士事務所に通報窓口を設置する。コンプライアンス推進委員会は、通報窓口等を通じて内部通報等の報告を受けたときは、事実関係を調査した上、法令違反等が明らかになった場合には、速やかに是正措置及び再発防止措置を講じる。
 - e. 当社及び子会社は、社会の一員として、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体とは一切の関係を持たず、毅然とした態度で対応する。
- イ. 当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
- a. 当社は、法令及び社内規定（主として「文書作成規定」及び「文書管理規定」）に基づき、該当文書の作成・保存を行う。文書保存年限については、重要文書は原則10年、特に重要なものは永久保存とし、文書保存年限表において個別具体的に定める。
 - b. 情報の管理については、「情報セキュリティポリシー」「内部情報管理規定」「個人情報保護規定」等に基づき厳正に運営する。
- ウ. 当社及び子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- a. 当社は、取締役会直結の組織として、代表取締役社長を当社グループ全体に亘るリスクに関するリスク管理統括責任者とする「リスク管理委員会」を設置する。
リスク管理委員会は、あらかじめ具体的なリスクを想定・分類し、有事の際の迅速かつ適切な情報伝達と緊急体制を整備することを目的とし、まず最優先課題として、現在の外部環境・内部環境を踏まえて、当社グループに内在し経営に重要な影響を及ぼす可能性のあるあらゆるリスク（短期的及び長期的リスク）を洗い出し実態の把握を行う。
 - b. リスク管理委員会は、定期的に各事業部門におけるリスクの把握、体制の整備に係る進捗状況や、個別事案の検証結果をレビューして取締役会に報告し、共通認識として議論した上で、次の段階として、最優先課題として認識された重要リスクに対しては、リスク管理委員会のもとに各種専門部会を設けることによって、リスク未然防止のための対応策、リスクが現実化した場合の対処方法をより具体的に定めるなど、順次リスク管理体制の構築を進めていく。
- エ. 当社及び子会社の取締役・使用人の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- a. 当社は、定例の取締役会を毎月1回開催し、経営方針、法令で定められた事項やその他経営に関する重要事項を決定するとともに、業務執行状況を監督する。決議を要する事項については、「取締役会規程」とは別に詳細を定めて役員・使用人全員に公開している「取締役会決議事項付議基準」に基づき、ガラス張りで運用する。
また、取締役の一部を中心に構成される経営会議を月1回以上開催し、個別経営課題を実務的な観点から協議する。
 - b. 当社の取締役、執行役員及び使用人の職務執行に当たっての役割分担及び決裁体制については、「職務分掌規定」「職務権限規定」に詳細を定める。
 - c. 当社は、執行役員制度を有効に活用し、
 - (a) 取締役は、経営の意思決定の迅速化、監督機能の強化など本来果たすべき役割に特化し、経営機能をより一層充実させる。
 - (b) 業務執行権限を取締役から執行役員に大幅に委譲し、執行責任・報告義務を明確化することにより、業務執行の効率化を図っていく。
 - d. 当社は、子会社の自主性を尊重し、かつ緊密な連携を保ち、「関係会社管理規定」に基づき、経営上の重要事項については事前に子会社と協議するとともに、管理基準等に従って効率的なグループ経営が行われるよう管理を行う。
 - e. 当社は、子会社に取締役・使用人の職務分掌及び職務権限に関するルールを整備させるとともに、適正かつ効率的に運用されるよう管理を行う。

オ．その他の当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

- a．当社は、「関係会社管理規定」に基づき経営企画部を中心に行っている子会社のモニタリングをさらに強化する。具体的には、各子会社の経営上の重要事項に関する当社への報告や承認のルールを定める「関連会社職務権限」の見直しを行う。
- b．当社の監査役が自ら又は子会社の監査役と協働して連結経営に対応したグループ全体の監視・監査を実効的かつ適正に行えるように図るとともに、会計監査人及び内部監査室との緊密な連携等の的確な体制を構築する。
- c．当社は、定期的に重要事項に関する職務執行状況を子会社に報告させる。また、子会社は、職務執行に関し重大な法令・定款違反及び不正行為の事実、又は会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実があることを発見したときは、速やかに当社に報告を行う。
- d．当社は、「関係会社管理規定」に基づき、株主総会・取締役会に関する事項や業績・決算に関する事項を定期的に文書により子会社に報告させる。

カ．財務報告の信頼性を確保するための体制

当社は、当社グループの財務報告の信頼性を確保するため、代表取締役社長を責任者とする財務に係わる内部統制システムを構築し、財務報告に重要な虚偽記載が生じることがないように、内部監査室が予防及び牽制機能の整備・運用状況を調査・検討・評価し、不備があれば是正していく体制の維持、向上を図る。

キ．当社の監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項、当該使用人の取締役からの独立性に関する事項、並びに監査役の当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する体制

当社は、現在のところ監査役の職務を補助すべき使用人は置いていないが、将来必要となり監査役が求めた場合には、取締役はその意向を尊重するものとし、その場合当該使用人の選解任については、監査役会と事前に協議の上決定するものとする。

また、当該使用人を置いた場合には、当社は、監査役の当該使用人に対する指示の実効性を確保する。

ク．当社及び子会社の取締役・使用人等が当社の監査役に報告するための体制その他監査役への報告に関する体制

- a．当社グループの役員・使用人は、職務執行に関し重大な法令・定款違反及び不正行為の事実、又は会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実があることを発見したとき、あるいはその旨の報告を受けたときは、速やかに当社の監査役に対し報告を行う。
- b．当社の監査役は、決算関係書類、稟議書、各種会議の議事録、その他業務執行に関する重要な文書を関係部署からの直接送付又は回覧等により閲覧し、必要に応じて当社グループの役員・使用人から直接説明を求めるとする。
- c．内部監査室は、当社グループの役員・使用人から報告を受けた場合には、適時適切に当社の監査役に報告する。
- d．当社は、監査役及び内部監査室に報告を行った当社グループの役員・使用人に対し、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを行うことを禁止し、その旨を周知徹底する。

ケ．当社の監査役職務の執行について生ずる費用の前払い又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用、債務の処理に係る方針に関する事項

当社は、監査役がその職務の執行について当社に対して会社法第388条に基づく費用の前払い等の請求をしたときは、当該請求に係る費用又は債務が当該監査役職務の執行に必要なでないと認められた場合を除き、速やかに当該費用又は債務を処理する。

コ．その他当社の監査役職務の執行が実効的に行われることを確保するための体制

- a．当社は、監査役が取締役会への出席はもとより、意思決定の過程や業務執行状況を把握するため、重要な会議に出席するとともに、代表取締役や内部監査室とも定期的に打合せ、情報交換を行うことができるよう体制を整備することとし、取締役会はこれを担保する。
- b．監査役が、当社の会計監査人である有限責任あずさ監査法人から会計監査内容について説明を受けるとともに、定期打合せや随時意見交換、情報交換を行うなど緊密な連携を図っていくことができるよう確かな体制を構築する。

・リスク管理体制の整備の状況

当社では、考えられる様々なリスクを事前にチェックし極小化するため、開発・生産・営業・物流など各部門の代表者が集まってそれぞれの立場から意見を述べ、議論を尽くすことを重視しておりますが、これとは別に取締役会直結の組織として代表取締役社長を当社グループ全体に亘るリスクに関する管理統括責任者とする「リスク管理委員会」を設置しております。その内容は、前記の「内部統制システムの整備の状況」ウ、当社及び子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制」に記載のとおりであります。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社では、子会社の業務の適正を確保するため、各種施策により子会社の経営管理体制の強化を図っております。その内容は、前記の「内部統制システムの整備の状況」オ、その他の当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制」に記載のとおりであります。

・責任限定契約の内容の概要

当社は、社外取締役・社外監査役の会社法第423条第1項の責任について、当該社外取締役・社外監査役が職務を行うにつき、善意でかつ重大な過失がないときは法令に定める額を限度とする旨の契約を各社外取締役・社外監査役との間で締結しております。

・取締役の定数

当社の取締役は13名以内とする旨を定款に定めております。

・取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

取締役の解任決議については、議決権を行使することができる株主の議決権の過半数を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行うものとします。

・取締役会で決議できる株主総会決議事項

ア、当社は、会社法第165条第2項の規定により、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を遂行することができるよう、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。

イ、当社は、会社法第454条第5項の規定により、株主への機動的な利益還元を可能にするため、取締役会の決議により、毎年9月30日の株主名簿に記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

・株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性 15名 女性 -名 (役員のうち女性の比率 -%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役社長 社長執行役員	山中龍夫	1952年1月28日	1976年4月(株)住友銀行入行 2007年4月(株)三井住友銀行常務執行役員 コーポレート・アドバイザー 本部長 2010年5月 当社顧問 2010年6月 取締役副社長執行役員就任 2011年6月 代表取締役社長、社長執行役員 就任(現任)	(注)6	22
取締役 専務執行役員 海外本部長兼 経営企画部長	小島一行	1965年3月8日	1987年4月 当社入社 2012年4月 経営企画部長 2013年4月 執行役員就任 2014年4月 上席執行役員就任 2015年4月 上席執行役員海外本部長兼経営 企画部長 2015年6月 取締役上席執行役員就任 2016年6月 取締役常務執行役員就任 2018年4月 取締役専務執行役員就任(現任)	(注)6	3
取締役 専務執行役員 生産本部・調達本部・ 財務部・総務部担当	殿井一史	1963年11月7日	1986年4月(株)住友銀行入行 2014年4月(株)三井住友銀行本店営業第十 部長 2015年4月 当社顧問 2015年10月 常務執行役員就任 2016年6月 取締役常務執行役員就任 2018年4月 取締役専務執行役員就任(現任)	(注)6	3
取締役 専務執行役員 技術本部長兼技術部長	河村好則	1959年2月19日	1984年4月 日本セメント(株)入社 2008年4月 日本セラテック(株)執行役員圧 電事業部長 2010年2月 当社入社 2011年4月 生産技術部長 2014年4月 執行役員就任 2015年4月 上席執行役員就任 2016年6月 取締役上席執行役員就任 2017年6月 取締役常務執行役員就任 2019年4月 取締役専務執行役員就任(現任)	(注)6	1
取締役 常務執行役員 生産本部長	河内一弘	1964年5月19日	1987年4月 当社入社 2010年4月 いわき工場長 2013年4月 執行役員就任 2014年4月 上席執行役員就任 2015年6月 取締役上席執行役員就任 2017年6月 取締役常務執行役員就任(現任)	(注)6	2
取締役 常務執行役員 営業本部長	川島久幸	1963年8月31日	1986年4月 当社入社 2009年10月 首都圏営業部長 2014年4月 執行役員就任 2015年4月 上席執行役員就任 2016年6月 取締役上席執行役員就任 2018年4月 取締役常務執行役員就任(現任)	(注)6	4
取締役 常務執行役員 営業本部副本部長	今朝丸和弘	1961年12月13日	1986年4月(株)住友銀行入行 2016年4月(株)三井住友銀行大阪第二法人 営業本部長 2018年4月 当社営業本部副本部長 2018年10月 常務執行役員就任 2019年6月 取締役常務執行役員就任(現任)	(注)6	1

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 上席執行役員 調査部長	吉田康則	1961年3月31日	1991年4月 日本セメント(株)事業推進グループリーダー 2007年6月 (株)N F Kホールディングス取締役 2009年4月 当社顧問 2010年4月 執行役員就任 2013年4月 上席執行役員就任 2015年6月 取締役上席執行役員就任(現任)	(注)6	2
取締役	八木清文	1960年5月4日	1986年10月 司法試験合格 1989年3月 最高裁判所司法研修所終了 1989年4月 弁護士登録(第一東京弁護士会) 2003年1月 磯邊・高橋・八木法律事務所 パートナー弁護士就任(現任) 2004年6月 三和機材(株)社外監査役(現任) 2009年4月 第一東京弁護士会副会長 2009年8月 (株)徳間書店社外監査役 2009年9月 りんかい日産建設(株)社外監査役 2012年6月 当社監査役就任 2015年4月 日本弁護士国民年金基金常務理事 2015年6月 当社取締役就任(現任)	(注)6	-
取締役	田尻直樹	1949年3月10日	1972年4月 住友金属鉱山(株)入社 2001年6月 同社経理部長 2003年6月 同社執行役員経理部長 2006年6月 同社常務執行役員経理部長 2008年6月 同社取締役専務執行役員経営企画部長 2010年6月 同社常任監査役 2014年6月 同社顧問(現任) 2015年6月 当社監査役就任 2019年6月 当社取締役就任(現任)	(注)6	-
監査役 (常勤)	柴田佳寛	1957年7月10日	1980年4月 当社入社 2005年11月 生産技術部長 2009年4月 執行役員就任 2013年4月 上席執行役員就任 2014年6月 取締役上席執行役員就任 2015年6月 監査役(常勤)就任(現任)	(注)5	7
監査役 (常勤)	水野昭彦	1955年9月7日	1979年4月 住友信託銀行(株)入社 2004年10月 同社渋谷支店長 2006年7月 当社総務部部长 2008年4月 執行役員就任 2014年4月 上席執行役員就任 2016年6月 監査役(常勤)就任(現任)	(注)4	2
監査役	小谷津久	1952年6月4日	1975年4月 (株)住友銀行入行 2001年4月 (株)三井住友銀行千住法人営業部長 2003年6月 三井住友カード(株)取締役人事部 部長、研修室長 2013年6月 同社代表取締役専務執行役員管理 本部長 2014年6月 (株)エスシー・カードビジネス 代表取締役社長 2016年6月 当社監査役就任(現任)	(注)4	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
監査役	杉浦勝美	1954年2月24日	1976年4月 名古屋国税局入局 2007年7月 広島国税局厚狭税務署長 2008年7月 名古屋国税局名古屋東税務署長 2011年7月 同局津税務署長 2013年7月 同局調査部長 2014年9月 税理士登録 杉浦勝美税理士事務所開設、所長就任(現任) 2015年4月 名古屋経済大学大学院法学研究科客員教授(現任) 2015年6月 (株)K V K 社外監査役(現任) 2016年6月 当社監査役就任(現任)	(注)4	-
監査役	佐々木健次	1955年9月14日	1983年9月 監査法人太田哲三事務所入所 1988年3月 公認会計士登録 2000年5月 監査法人太田昭和センチュリーパートナー 2006年6月 新日本監査法人シニアパートナー 2018年7月 佐々木健次公認会計士事務所開設、所長就任(現任) 2019年6月 当社監査役就任(現任)	(注)5	-
計					49

- (注) 1. 取締役のうち、八木清文、田尻直樹の各氏は、社外取締役であります。
2. 監査役のうち、小谷津久、杉浦勝美、佐々木健次の各氏は、社外監査役であります。
3. 当社は取締役会の一層の活性化を促し、取締役会の意思決定・業務執行の監督機能と各部門の業務執行機能を明確に区分し、経営効率の向上を図るために執行役員制度を採用しております。
- なお、提出日現在の執行役員の構成は以下のとおりであります。
- | | |
|--------|----|
| 社長執行役員 | 1名 |
| 専務執行役員 | 3名 |
| 常務執行役員 | 3名 |
| 上席執行役員 | 4名 |
| 執行役員 | 6名 |
4. 2016年6月23日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
5. 2019年6月25日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
6. 2019年6月25日開催の定時株主総会の終結の時から1年間

社外役員の状況

当社では、社外取締役2名・社外監査役3名を選任しております。

いずれも当社との間に人的関係及び取引関係はありません。(社外取締役2名・社外監査役3名の当社株式の保有状況については前記の「(2) 役員の状況 役員一覧」に記載のとおりです。)

また、社外取締役・社外監査役に関する独立性の基準又は方針については、会社法に定める社外取締役・社外監査役の要件及び金融商品取引所が定める独立性基準を当社の判断基準としております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門(総務部・財務部などの管理部門)との関係

社外取締役については、取締役会において、専門的な知識や豊富な経験に基づいて適宜、質問・問題提起・助言等を行うことにより取締役会の活性化に努めております。また、取締役による経営判断や業務執行状況の妥当性に係るチェック・助言等の役割を果たすとともに、監査役会や内部統制部門(総務部・財務部などの管理部門)とも連携して経営監督機能の強化を図っております。

社外監査役については、取締役会・監査役会において、各々の専門的な知識や豊富な経験に基づいて適宜、質問・問題提起・助言等を行うことにより、経営監視機能の充実に寄与しております。また、当社各工場・支店や必要に応じて海外拠点、重要な連結子会社へも実際に足を運び、実態の把握に努めており、代表取締役社長とも適宜意見交換を行い、会社の外からの客観的な眼による監査を実施するなど、企業行動の公正性、透明性を高めることに努めております。

当社は、現在、社外監査役を補佐する担当者は置いておりませんが、常勤の社内監査役及び内部統制部門の協力・連携の下、取締役会資料等主要な書類を送付、必要に応じ、情報を電話や電子メールで報告する体制をとっております。

また、会計監査との連携については、社外監査役が会計監査人の実施する監査報告会等に出席して意見・情報交換を行うなど、相互認識を深めるよう努めております。

さらに、内部統制部門に対しては、各社外監査役が社内常勤監査役と連携して適宜、コンプライアンス・リスク管理・会計等に関する必要な提言や助言を行っております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役は常勤2名、非常勤3名の5名体制で、非常勤の3名は他の会社等の出身である社外監査役であります。

監査役は、監査役会で定めた監査方針・監査計画等に従い、取締役・内部監査室との意思疎通を図り、情報収集及び監査の環境整備に努めるとともに、会社の業務及び財産に関する調査、取締役等の職務執行状況報告の聴取、重要な決裁書類の閲覧、内部統制の監視及び検証等により厳正な監査を実施しております。

代表取締役社長とは半期に1回の定期打合せのほか、必要な都度、意見交換を行い、相互認識を深めております。また、会計監査人・内部監査室・子会社監査役とも適宜打合せ及び情報交換を実施し、当社グループ全体の情報の共有化と監査品質の向上に努めております。

内部監査の状況

内部監査室は4名で構成されており、代表取締役社長直轄の下、当社の管理体制・内部牽制体制など、内部統制システムが有効に機能しているかのチェック・評価・是正指導を実施しております。

内部監査については、経営諸活動全般に亘る管理・運営の制度及び業務の遂行状況を検証するとともに、従業員がその責務を効果的に遂行できるよう支援すべく情報の提供並びに改善・合理化への助言・提案に努めております。そして、内部監査室より毎月代表取締役社長宛監査報告がなされております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任あずさ監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

鈴木 賢次

稲垣 吉登

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る当事業年度における補助者は、公認会計士5名、その他10名により構成されております。

d. 監査法人の選定方針と理由

監査法人の選定に関しては、監査法人のガバナンス体制や品質管理体制、独立性に関する事項等を勘案し選定しております。

有限責任あずさ監査法人のガバナンス体制、品質管理体制及び独立性に関する事項に係る遵守状況について、これまでの監査実績から問題ないと判断しており、また、当社の業務内容及びリスク等に精通していることから、当社の会計監査人として適当と判断しております。

当社監査役会では、「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」（日本監査役協会）を参考に評価基準を定め、各項目の評価を行った結果、同監査法人を解任・不再任としないことを決議しております。

なお、当社監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合、監査役全員の同意により会計監査人を解任し、監査役が解任後最初に招集される株主総会において解任した旨と解任の理由の報告を行います。

また、会計監査人が会社法（前記第340条第1項各号以外の事由）、公認会計士法の法令に違反、抵触した場合及び公序良俗に反する行為があったと判断した場合は、審議のうえ、株主総会に付議する会計監査人の解任又は不再任の議案の内容を当社監査役会が決定いたします。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社監査役会は、経営執行部門から会計監査人の活動実態について報告を聴取し、自ら事業年度を通じて会計監査人から会計監査についての報告を聴取し、必要に応じて現場立会等を行うことにより、会計監査人が監査品質を維持し適切に監査しているかを評価しています。

評価項目は、監査法人の品質管理、監査チームの構成・能力や職業的懐疑心の保持・発揮状況、監査役あるいは経営者・内部監査部門等とのコミュニケーション、関係会社の監査状況、不正リスクに関する対応等であり、

この結果、解任又は不再任の事由は認められず、監査品質を維持し、適切に監査していると判断しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	46	-	46	-
連結子会社	4	0	3	0
計	50	0	49	0

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク(KPMGメンバーファーム)に属する組織に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	-	8	-	-
連結子会社	-	5	-	10
計	-	13	-	10

当社における非監査業務の内容は、税制対応アドバイザリー業務です。
連結子会社における非監査業務の内容は、税務申告業務等です。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

(前連結会計年度)

当社の連結子会社であるNichiha USA, Inc.は、HOTTA LIESENBERG SAITO LLPに対して、72千米ドル支払っております。

(当連結会計年度)

当社の連結子会社であるNichiha USA, Inc.は、HOTTA LIESENBERG SAITO LLPに対して、173千米ドル支払っております。

d. 監査報酬の決定方針

当社では監査報酬の決定方針を特に定めておりませんが、会計監査人より提出される工数見積、見積単価よりその妥当性を判断し決定しております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬に同意した理由

会計監査人の監査報酬は、監査法人から提示される監査計画に基づいた項目別監査見込時間をベースとした見積額に対し、監査計画の内容及び項目別の監査見込時間の妥当性を精査した上で監査法人と協議し決定しています。

当社監査役会は、監査法人及び経営執行側の双方から説明を受け、監査法人の監査品質への影響を踏まえた上で、当該監査報酬は相当であるものとして、同意しております。

(4)【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の決定権限を有する者は取締役会であり、その権限及び裁量は、株主総会決議により取締役会に委任された役員報酬に関する事項の範囲内としております。

また、当社における役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容は、次のとおりです。

・ 役員の報酬等の額について

取締役（社外取締役を除く）に対しては、企業価値の持続的な向上を意識した経営を推進するため、月例定額報酬を基礎とし、各期における功労等を勘案して賞与を支給するとともに、業績向上の意欲を高めるため株式報酬型ストックオプションを採用しております。他方、社外取締役はコーポレート・ガバナンスの要として経営監督等を行い、また監査役は経営監視等を行うため、月例定額報酬のみとしております。

・ 算定方法について

取締役の月例定額報酬は、取締役・執行役員の役位及び常勤・非常勤の別を、監査役の月例定額報酬は監査役の常勤・非常勤の別をそれぞれ基準としております。また、取締役の賞与は月例定額報酬を基準としつつ各期における功労等を勘案して加減算し、取締役の株式報酬型ストックオプションは株価及び役位等を基準としております。

・ 決定方法について

前記のいずれの報酬も株主総会で決議された範囲内において、取締役につきましては取締役会で、監査役につきましては監査役の協議でこれを決定しております。なお、各取締役の報酬は取締役会の授権を受けた代表取締役社長が決定しております。

当社の役員の報酬等の決定過程においては、代表取締役社長と社外取締役との会合において役員報酬に関する意見交換を行っております。

なお、役員の報酬等の額に関する株主総会の決議の概要は、下記のとおりです。

・ 取締役の報酬（月例定額報酬・賞与）

ア．決議日：2012年6月26日

イ．内 容：賞与を含めた取締役の報酬額を年額4億円以内とする。

・ 監査役の報酬（月例定額報酬）

ア．決議日：1994年6月29日

イ．内 容：監査役の報酬額を年額6千万円以内とする。

・ 取締役の株式報酬型ストックオプション報酬

ア．決議日：2008年6月25日

イ．内 容：取締役に対するストックオプションとしての新株予約権に関する報酬等の額を、各事業年度に係る定時株主総会の日から1年間につき年額1億円以内とする。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	
取締役 (社外取締役を除く。)	308	195	22	90	8
監査役 (社外監査役を除く。)	26	26	-	-	2
社外役員	28	28	-	-	6

(注) ストックオプションの欄には、取締役に対するストックオプションの報酬額としての新株予約権の費用計上額を記載しております。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、投資株式について、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的として保有する株式を純投資目的である投資株式、それ以外の株式を純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）に区分しております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

- a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会における検証の内容

当社は、事業戦略、取引の維持・強化などの保有目的に合理性があると認められ、中長期的に当社の企業価値向上に資すると考えられる場合に上場株式を政策的に保有します。

また、政策保有株式については、当社を取り巻く事業環境の変化の中で、毎年、取締役会において個別銘柄ごとに保有目的や経済合理性などについて検証し、保有適否の妥当性を検証しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	16	91
非上場株式以外の株式	22	5,490

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	1	1	取引先持株会を通じた株式の取得

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	0
非上場株式以外の株式	-	-

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
大和ハウス工業(株)	406,000	406,000	営業取引関係の維持・強化	無
	1,428	1,664		
住友林業(株)	746,000	746,000	営業取引関係の維持・強化	有
	1,146	1,272		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
住友不動産(株)	217,000	217,000	営業取引関係の維持・強化	有
	995	853		
アイカ工業(株)	121,500	121,500	営業取引関係の維持・強化	有
	448	478		
JKホールディングス (株)	377,059	377,059	営業取引関係の維持・強化	有
	211	348		
三井住友トラスト・ ホールディングス (株)	51,304	51,304	金融取引を中心とした取引関係の維持・ 強化	無 (注)3
	203	220		
(株)三井住友フィナ ンシャルグループ	51,097	51,097	金融取引を中心とした取引関係の維持・ 強化	無 (注)4
	198	227		
OCHIホールディング ス(株)	149,688	149,688	営業取引関係の維持・強化	無
	176	212		
京阪神ビルディング (株)	148,000	148,000	営業取引関係の維持・強化	有
	159	131		
大東建託(株)	10,000	10,000	営業取引関係の維持・強化	無
	154	183		
すてきナイスグルー プ(株)	100,262	100,262	営業取引関係の維持・強化	有
	89	144		
積水ハウス(株)	30,886	30,205	営業取引関係の維持・強化 (株式数が増加した理由)取引先持株会 を通じた株式の取得	無
	56	58		
大建工業(株)	21,200	21,200	営業取引関係の維持・強化	有
	45	53		
伊藤忠商事(株)	22,220	22,220	営業等取引関係の維持・強化	無 (注)5
	44	45		
ジューテックホール ディングス(株)	34,500	34,500	営業取引関係の維持・強化	無 (注)6
	33	39		
北恵(株)	28,715	28,715	営業取引関係の維持・強化	有
	26	22		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)三十三フィナン シャルグループ (注)1	16,197	16,197	金融取引を中心とした取引関係の維持・ 強化	無 (注)7
	24	38		
住友商事(株)	14,672	14,672	営業等取引関係の維持・強化	有
	22	26		
竹田印刷(株)	20,000	20,000	調達取引関係の維持・強化	有
	13	20		
(株)サンヨーハウジ ング名古屋	8,000	8,000	営業取引関係の維持・強化	無
	7	10		
ミサワホーム(株)	2,310	2,310	営業取引関係の維持・強化	無
	1	2		
(株)山大	1,000	1,000	営業取引関係の維持・強化	無
	0	1		

- (注)1. 定量的な保有効果は、個別の取引状況を開示できないため記載が困難であります。保有の合理性は、銘柄ごとの保有目的、経済合理性、取引状況等により検証しております。
- 前事業年度に記載していた(株)三重銀行株式は、2018年4月2日に(株)三十三フィナンシャルグループへ株式移転されております。
 - 三井住友トラスト・ホールディングス(株)は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である三井住友信託銀行(株)は当社株式を保有しております。
 - (株)三井住友フィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である(株)三井住友銀行は当社株式を保有しております。
 - 伊藤忠商事(株)は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である伊藤忠建材(株)は当社株式を保有しております。
 - ジューテックホールディングス(株)は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である(株)ジューテックは当社株式を保有しております。
 - (株)三十三フィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である(株)三重銀行は当社株式を保有しております。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	82,500	82,500	当社の退職給付信託として設定している株式であり、議決権行使に関する指図権を有しております。	無 (注)2
	319	367		

- (注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。
2. (株)三井住友フィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同子会社である(株)三井住友銀行は当社株式を保有しております。

保有目的が純投資目的である投資株式
 前事業年度及び当事業年度のいずれにおいても該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」(2018年3月23日内閣府令第7号。以下「改政府令」という。)による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改政府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任あずさ監査法人による監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、研修等へ参加しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	27,786	33,172
受取手形及び売掛金	4 27,612	4 29,200
商品及び製品	11,803	12,525
仕掛品	1,918	2,343
原材料及び貯蔵品	3,019	3,230
その他	1,056	921
貸倒引当金	46	49
流動資産合計	73,150	81,343
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	41,929	42,000
減価償却累計額	29,019	29,864
建物及び構築物(純額)	1, 2 12,909	1, 2 12,135
機械装置及び運搬具	90,706	92,413
減価償却累計額	80,686	82,483
機械装置及び運搬具(純額)	2 10,020	2 9,930
工具、器具及び備品	5,741	5,887
減価償却累計額	5,367	5,534
工具、器具及び備品(純額)	2 373	2 353
土地	1, 2 20,381	1, 2 20,380
リース資産	559	456
減価償却累計額	355	184
リース資産(純額)	204	271
建設仮勘定	372	294
有形固定資産合計	44,262	43,366
無形固定資産		
リース資産	35	57
ソフトウェア	2 1,704	2 1,306
その他	245	231
無形固定資産合計	1,986	1,595
投資その他の資産		
投資有価証券	6,306	5,728
繰延税金資産	2,180	2,458
退職給付に係る資産	246	233
その他	1,496	1,366
貸倒引当金	23	24
投資その他の資産合計	10,205	9,762
固定資産合計	56,454	54,725
資産合計	129,605	136,068

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	4 14,450	4 14,905
短期借入金	280	210
1年内返済予定の長期借入金	1 5,064	1 2,553
リース債務	129	116
未払費用	5,693	5,995
未払法人税等	1,786	1,898
賞与引当金	1,347	1,481
役員賞与引当金	103	104
製品保証引当金	489	595
その他	4 3,034	4 3,689
流動負債合計	32,379	31,551
固定負債		
長期借入金	1 12,969	13,416
リース債務	129	239
繰延税金負債	439	379
役員退職慰労引当金	161	162
製品保証引当金	1,349	1,154
退職給付に係る負債	1,491	1,565
その他	187	195
固定負債合計	16,728	17,113
負債合計	49,108	48,664
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,136	8,136
資本剰余金	10,927	10,933
利益剰余金	59,776	67,417
自己株式	326	319
株主資本合計	78,513	86,167
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,567	2,162
為替換算調整勘定	277	237
退職給付に係る調整累計額	394	292
その他の包括利益累計額合計	2,449	1,632
新株予約権	103	112
非支配株主持分	3 569	3 507
純資産合計	80,497	87,404
負債純資産合計	129,605	136,068

【連結損益及び包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	116,144	119,160
売上原価	1, 2 69,564	1, 2 71,524
売上総利益	46,579	47,635
販売費及び一般管理費		
運賃及び荷造費	14,599	15,664
広告宣伝費及び販売促進費	1,816	1,684
貸倒引当金繰入額	6	2
給料手当及び福利費	7,634	7,637
賞与引当金繰入額	452	543
役員賞与引当金繰入額	103	105
退職給付費用	285	280
役員退職慰労引当金繰入額	25	26
減価償却費	794	810
試験研究費	1 1,300	1 1,253
製品保証引当金繰入額	267	398
その他	6,060	6,506
販売費及び一般管理費合計	33,347	34,914
営業利益	13,232	12,720
営業外収益		
受取利息	51	124
受取配当金	154	155
不動産賃貸料	88	89
為替差益	-	64
受取保険金	202	51
その他	364	115
営業外収益合計	861	600
営業外費用		
支払利息	161	137
為替差損	87	-
その他	47	46
営業外費用合計	296	183
経常利益	13,796	13,137

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
特別利益		
固定資産売却益	37	38
投資有価証券売却益	3	-
特別利益合計	11	8
特別損失		
固定資産売却損	-	40
固定資産除却損	5100	572
減損損失	6147	-
その他	1	-
特別損失合計	249	72
税金等調整前当期純利益	13,558	13,073
法人税、住民税及び事業税	3,340	3,323
法人税等調整額	1,013	229
法人税等合計	2,326	3,093
当期純利益	11,231	9,979
(内訳)		
親会社株主に帰属する当期純利益	11,151	9,915
非支配株主に帰属する当期純利益	80	63
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	561	405
為替換算調整勘定	120	516
退職給付に係る調整額	180	102
その他の包括利益合計	7621	7818
包括利益	11,853	9,160
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	11,774	9,098
非支配株主に係る包括利益	78	62

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,136	10,925	50,787	325	69,523
当期変動額					
剰余金の配当			2,162		2,162
親会社株主に帰属する当期純利益			11,151		11,151
自己株式の取得				4	4
自己株式の処分		2		2	5
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	2	8,988	1	8,989
当期末残高	8,136	10,927	59,776	326	78,513

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	2,006	395	575	1,826	75	648	70,777
当期変動額							
剰余金の配当							2,162
親会社株主に帰属する当期純利益							11,151
自己株式の取得							4
自己株式の処分							5
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	561	118	180	623	27	78	730
当期変動額合計	561	118	180	623	27	78	9,719
当期末残高	2,567	277	394	2,449	103	569	80,497

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,136	10,927	59,776	326	78,513
当期変動額					
剰余金の配当			2,274		2,274
親会社株主に帰属する当期純利益			9,915		9,915
自己株式の取得				1	1
自己株式の処分		5		8	14
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	5	7,641	6	7,654
当期末残高	8,136	10,933	67,417	319	86,167

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	2,567	277	394	2,449	103	569	80,497
当期変動額							
剰余金の配当							2,274
親会社株主に帰属する当期純利益							9,915
自己株式の取得							1
自己株式の処分							14
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	405	514	102	817	8	62	746
当期変動額合計	405	514	102	817	8	62	6,907
当期末残高	2,162	237	292	1,632	112	507	87,404

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	13,558	13,073
減価償却費	5,489	4,846
減損損失	147	-
製品保証引当金の増減額（は減少）	286	88
退職給付に係る負債の増減額（は減少）	69	220
受取利息及び受取配当金	206	279
支払利息	161	137
為替差損益（は益）	68	47
固定資産除却損	100	72
売上債権の増減額（は増加）	191	1,651
たな卸資産の増減額（は増加）	3,158	1,516
仕入債務の増減額（は減少）	529	510
その他	359	715
小計	14,863	15,993
利息及び配当金の受取額	197	268
利息の支払額	165	141
法人税等の支払額	3,791	3,148
法人税等の還付額	-	1
営業活動によるキャッシュ・フロー	11,103	12,973
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	-	668
有形固定資産の取得による支出	5,461	2,946
有形固定資産の売却による収入	10	9
無形固定資産の取得による支出	272	62
投資有価証券の取得による支出	0	1
投資有価証券の売却による収入	6	0
その他	16	73
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,700	3,595
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（は減少）	130	70
長期借入れによる収入	3,000	3,000
長期借入金の返済による支出	5,166	5,064
リース債務の返済による支出	146	143
配当金の支払額	2,162	2,274
その他	4	1
財務活動によるキャッシュ・フロー	4,350	4,553
現金及び現金同等物に係る換算差額	119	85
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	932	4,738
現金及び現金同等物の期首残高	26,854	27,786
現金及び現金同等物の期末残高	1 27,786	1 32,525

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 14社

主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため、省略しております。
なお、当連結会計年度より、NICHIIHA RUS LLCを新規設立したことにより、連結子会社に含めております。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

該当事項はありません。

2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、Nichiha USA, Inc.、ニチハ装飾建材(嘉興)有限公司及びニチハ装飾繊維セメント壁板(嘉興)有限公司の決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、当該連結子会社の同日現在の財務諸表を基礎としております。ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

なお、NICHIIHA RUS LLCについては、設立日が2019年1月25日であり、設立日から連結決算日である2019年3月31日までに決算日(12月31日)をむかえていないため、設立日の貸借対照表のみを連結しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定)

時価のないもの

総平均法による原価法

デリバティブ

時価法

たな卸資産

主として総平均法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

なお、原材料及び貯蔵品については主として移動平均法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、一部の連結子会社及び在外連結子会社は定額法

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法

また、在外連結子会社は所在地国の会計基準に基づく定額法

リース資産

定額法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする方法によっております。

長期前払費用

定額法

なお、償却期間については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。(なお、連結会社間債権に対応する部分は消去しております。)

賞与引当金

従業員への賞与の支払いに備えるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しております。

役員賞与引当金

役員への賞与の支払いに備えるため、当社及び一部の連結子会社は、当連結会計年度における支給見込額に基づき計上しております。

製品保証引当金

製品保証費用の支払いに備えるため、当社及び一部の連結子会社は、過去の発生実績率に基づいて計算した額に、発生した製品保証費用の実情を考慮した保証費発生見積額を加えて計上しております。

役員退職慰労引当金

役員及び執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、当社及び一部の連結子会社は、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(主として14年)による定率法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事(工期がごく短期間のものを除く)については工事進行基準を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産、負債は在外子会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

主として繰延ヘッジ処理を採用しております。また、為替変動リスクのヘッジについて振当処理の要件を満たしている場合には振当処理を、金利スワップについて特例処理の条件を満たしている場合には特例処理を採用しております。

また、連結会社間取引に付されたヘッジ目的のデリバティブについては、連結会社間の債権債務の相殺消去に伴い時価評価を行った上で、評価差額は当連結会計年度の損益として処理しております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。

- a.ヘッジ手段.....為替予約
ヘッジ対象.....外貨建金銭債権債務
- b.ヘッジ手段.....金利スワップ
ヘッジ対象.....借入金

ヘッジ方針

為替変動による外貨建金銭債権債務の損失可能性及び金利変動による借入債務の損失可能性を減殺する目的で行っております。

ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段とヘッジ対象の資産・負債に関する重要な条件が同一であり、かつヘッジ開始時及びその後も継続して、相場変動又はキャッシュ・フロー変動を完全に相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヵ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(会計方針の変更)

(在外子会社の収益及び費用の本邦通貨への換算方法の変更)

在外子会社の収益及び費用は、従来、各社の決算日の直物為替相場により円貨に換算しておりましたが、在外子会社の重要性の増加及び近年の著しい為替相場の変動を勘案した結果、在外子会社の業績をより適切に連結財務諸表に反映させるため、当連結会計年度より期中平均相場により円貨に換算する方法に変更しております。

なお、この変更による影響額は軽微であるため、遡及適用は行っていません。

(未適用の会計基準等)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606) を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。) を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更するとともに、税効果会計関係注記を変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が1,179百万円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が1,060百万円増加しております。

なお、同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債を相殺して表示しており、変更前と比べて総資産が119百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。) 及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載していません。

(会計上の見積りの変更)

(退職給付に係る会計処理の数理計算上の差異の費用処理年数の変更)

退職給付に係る会計処理の数理計算上の差異の費用処理年数について、従来、従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(主として15年) で費用処理しておりましたが、平均残存勤務期間がこれを下回ったため、当連結会計年度より費用処理年数を主として14年に変更しております。

なお、当該変更に伴う損益に与える影響額は軽微であります。

(連結貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
建物及び構築物	0百万円	0百万円
土地	21	21
計	21	21

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内返済予定の長期借入金	16百万円	5百万円
長期借入金	5	-
計	22	5

2 圧縮記帳

国庫補助金等の受入により、取得価額から控除した圧縮記帳累計額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
建物及び構築物	47百万円	47百万円
機械装置及び運搬具	856	856
工具、器具及び備品	8	8
土地	100	100
ソフトウエア	2	2
計	1,015	1,015

3 非支配株主持分の処理

非支配株主持分については、連結子会社である二子八富士テック株式会社において生じた債務超過分について、株主間の合意に基づき当該債務超過分の一部を非支配株主へ負担させております。

4 連結会計年度末日満期手形等

連結会計年度末日満期手形等の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形等が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	19百万円	14百万円
電子記録債権	242	228
支払手形	8	8
設備関係支払手形	20	19

(連結損益及び包括利益計算書関係)

1 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	1,528百万円	1,470百万円

2 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下げ後の金額(洗替法)であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	184百万円	6百万円

3 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
機械装置及び運搬具	7百万円	8百万円
計	7	8

4 固定資産売却損の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
工具、器具及び備品	- 百万円	0百万円
計	-	0

5 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	18百万円	4百万円
機械装置及び運搬具	54	49
工具、器具及び備品	0	0
その他	26	19
計	100	72

6 減損損失

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

場所	用途	種類
北海道札幌市他	ウレタン断熱パネル製造設備等	建物等

当社グループは、継続的に収支の把握を行っている管理会計上の区分により、グルーピングを行っておりません。

これらの資産グループのうち、当連結会計年度において、営業活動から生じる損益が継続してマイナスとなっている資産グループに関し、投資額の回収が見込まれない状況となったため、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、減損損失として特別損失に計上いたしました。

その内訳は、建物及び構築物127百万円、機械装置及び運搬具11百万円、工具、器具及び備品2百万円、ソフトウェア5百万円であります。

なお、回収可能価額は正味売却価額により測定しており、固定資産税評価額等を基に合理的な調整を行って算出した金額としております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

7 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	816百万円	578百万円
組替調整額	3	-
税効果調整前	812	578
税効果額	251	172
その他有価証券評価差額金	561	405
為替換算調整勘定		
当期発生額	120	516
退職給付に係る調整額		
当期発生額	140	61
組替調整額	117	86
税効果調整前	257	147
税効果額	77	45
退職給付に係る調整額	180	102
その他の包括利益合計	621	818

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	37,324	-	-	37,324
合計	37,324	-	-	37,324
自己株式				
普通株式(注)1・2	352	0	3	349
合計	352	0	3	349

(注)1. 普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少3千株は、ストック・オプションの行使による減少であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権 の目的とな る株式の種 類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計 年度末残高 (百万円)
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 (親会社)	ストック・オプション としての新株予約権		-	-	-	-	103
合計			-	-	-	-	103

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月23日 定時株主総会	普通株式	1,146	31.0	2017年3月31日	2017年6月26日
2017年11月8日 取締役会	普通株式	1,016	27.5	2017年9月30日	2017年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	1,238	利益剰余金	33.5	2018年3月31日	2018年6月27日

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（千株）	当連結会計年度 増加株式数（千株）	当連結会計年度 減少株式数（千株）	当連結会計年度末 株式数（千株）
発行済株式				
普通株式	37,324	-	-	37,324
合計	37,324	-	-	37,324
自己株式				
普通株式（注）1・2	349	0	8	341
合計	349	0	8	341

（注）1. 普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少8千株は、ストック・オプションの行使による減少であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権 の目的とな る株式の種 類	新株予約権の目的となる株式の数（株）				当連結会計 年度末残高 （百万円）
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 （親会社）	ストック・オプション としての新株予約権		-	-	-	-	112
	合計		-	-	-	-	112

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	1,238	33.5	2018年3月31日	2018年6月27日
2018年11月7日 取締役会	普通株式	1,035	28.0	2018年9月30日	2018年12月3日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年6月25日 定時株主総会	普通株式	1,035	利益剰余金	28.0	2019年3月31日	2019年6月26日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	27,786百万円	33,172百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	-	646
現金及び現金同等物	27,786	32,525

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

(ア)有形固定資産

主に工具、器具及び備品であります。

(イ)無形固定資産

ソフトウェアであります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	28	28
1年超	130	99
合計	159	128

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行等金融機関からの借入によることとしております。デリバティブは、後述するリスクを回避、抑制するために利用しており、投機的な取引及びレバレッジ効果の高い取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されておりますが、販売先のほとんどは信用度の高い大手建材商社であります。

投資有価証券は、主に取引上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、定期的に時価や発行体の財務状況等を把握し、減損懸念の早期把握やリスクの低減を図っております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが6ヵ月以内の支払期日であります。また、その一部には、原料等の輸入に伴う外貨建てのものがあり、為替の変動リスクに晒されておりますが、債務残高は僅少であります。

短期借入金は、主に営業取引に係る資金調達であります。長期借入金は、主に設備投資に係る資金の調達を目的としたものであり、償還日は決算日から最長で6年6ヵ月後であります。変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されておりますが、デリバティブ取引(金利スワップ取引)を利用してヘッジしております。

デリバティブ取引は、外貨建ての金銭債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした先物為替予約取引及び借入金に係る支払金利の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引であります。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (7) 重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりであります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行に係るリスク)の管理

当社又は当社グループは、与信管理に関する規定に従い、営業債権について、取引先ごとの回収期日や債権残高を管理しております。また、営業部門が主要取引先の状況を定期的にモニタリングし、財務部門との情報共有を行いながら、財務状況等の悪化による貸し倒れリスクの低減に努めております。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

当社又は当社グループは、外貨建ての営業債権債務に係る為替の変動リスクに対して、先物為替予約を利用してヘッジしております。また、借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しております。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体の財務状況等を把握し、減損懸念の早期把握やリスクの低減を図っております。また、満期保有目的の債券以外のものについては、市場や取引先企業との関係を勘案しつつ保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引については、取引権限等を定めた社内規定に従い、決裁権限者の承認のもと、当社の財務部にて実行及び管理を行っております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払を実行できなくなるリスク)の管理

当社又は当社グループは、各部署からの報告に基づき財務担当部署が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持等により、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては、一定の前提条件等を採用しており、異なる前提条件によった場合、当該価額が異なる場合があります。また、「2. 金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（注）2参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	27,786	27,786	-
(2) 受取手形及び売掛金	27,612	27,612	-
(3) 投資有価証券			
その他有価証券	6,211	6,211	0
資産計	61,611	61,611	0
(1) 支払手形及び買掛金	14,450	14,450	-
(2) 短期借入金	280	280	-
(3) 長期借入金（1年以内返済予定を含む）	18,034	18,112	78
負債計	32,765	32,843	78
デリバティブ取引（*）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	55	55	-
ヘッジ会計が適用されているもの	-	-	-
デリバティブ取引計	55	55	-

（*）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で示しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	33,172	33,172	-
(2) 受取手形及び売掛金	29,200	29,200	-
(3) 投資有価証券			
その他有価証券	5,634	5,634	0
資産計	68,006	68,006	0
(1) 支払手形及び買掛金	14,905	14,905	-
(2) 短期借入金	210	210	-
(3) 長期借入金（1年以内返済予定を含む）	15,969	16,109	139
負債計	31,085	31,224	139
デリバティブ取引（*）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	1	1	-
ヘッジ会計が適用されているもの	-	-	-
デリバティブ取引計	1	1	-

（*）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、市場価格のあるものは市場価格によっており、市場価格のないものは対象金融資産から発生する将来キャッシュ・フローを割り引くことにより算定しております。また保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期借入金（1年以内返済予定を含む）

これらの時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。変動金利による長期借入金の一部は金利スワップの特例処理の対象とされており、当該金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に適用される合理的に見積もられる利率で割り引いて算定する方法によっております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式	94	94

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
 前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	27,786	-	-	-
受取手形及び売掛金	27,612	-	-	-
投資有価証券 その他有価証券のうち満期 があるもの 債券	0	2	-	-
合計	55,400	2	-	-

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	33,172	-	-	-
受取手形及び売掛金	29,200	-	-	-
投資有価証券 その他有価証券のうち満期 があるもの 債券	0	1	-	-
合計	62,372	1	-	-

4. 長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
 前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	280	-	-	-	-	-
長期借入金	5,064	2,553	1,489	888	2,111	5,928
合計	5,344	2,553	1,489	888	2,111	5,928

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	210	-	-	-	-	-
長期借入金	2,553	1,489	888	2,111	2,928	6,000
合計	2,763	1,489	888	2,111	2,928	6,000

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	6,063	2,360	3,703
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	6,063	2,360	3,703
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	145	156	10
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	2	2	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	147	158	10
合計		6,211	2,519	3,692

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額94百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	5,503	2,315	3,187
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	5,503	2,315	3,187
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	129	203	73
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	2	2	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	131	205	73
合計		5,634	2,520	3,114

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額94百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	6	3	-
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	6	3	-

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	0	-	-
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	0	-	-

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の 取引	為替予約取引				
	売建 米ドル	2,042	-	55	55
合計		2,042	-	55	55

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の 取引	為替予約取引 売建 米ドル	314	-	1	1
	合計	314	-	1	1

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

該当事項はありません。

(2) 金利関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超(百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引 変動受取・ 固定支払	長期借入金	566	150	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超(百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引 変動受取・ 固定支払	長期借入金	150	-	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び国内連結子会社は、確定給付型の制度として確定給付企業年金制度を設けるとともに退職一時金制度を設けており、確定給付型以外の制度として、当社は一部につき確定拠出年金制度を導入し、国内連結子会社の一部は中小企業退職金共済制度に加入しております。

また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

なお、当社において退職給付信託を設定しております。

2. 確定給付制度(簡便法を適用した制度を除く)

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	6,418百万円	6,731百万円
勤務費用	348	348
利息費用	6	7
数理計算上の差異の発生額	126	56
退職給付の支払額	168	198
退職給付債務の期末残高	6,731	6,832

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	5,762百万円	6,162百万円
期待運用収益	5	6
数理計算上の差異の発生額	266	4
事業主からの拠出額	295	277
退職給付の支払額	168	198
年金資産の期末残高	6,162	6,251

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	6,731百万円	6,832百万円
年金資産	6,162	6,251
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	569	580
退職給付に係る負債	569	580
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	569	580

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	348百万円	348百万円
利息費用	6	7
期待運用収益	5	6
数理計算上の差異の費用処理額	117	86
確定給付制度に係る退職給付費用	466	436

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	257百万円	147百万円

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	568百万円	421百万円

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	19%	18%
株式	32	30
一般勘定	48	49
その他	1	3
合計	100	100

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度8%、当連結会計年度5%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率	0.11%	0.11%
長期期待運用収益率	0.11%	0.11%

(注) 当社の確定給付企業年金制度はポイント制を採用しているため、前連結会計年度及び当連結会計年度において「予想昇給率」を退職給付債務等の計算の基礎に組み入れておりません。

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る資産の期首残高	230百万円	246百万円
退職給付費用	20	24
退職給付の支払額	-	3
制度への拠出額	36	7
退職給付に係る資産の期末残高	246	233

(2) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	853百万円	922百万円
退職給付費用	128	131
退職給付の支払額	60	70
退職給付に係る負債の期末残高	922	984

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	513百万円	539百万円
年金資産	760	772
	246	233
非積立型制度の退職給付債務	922	984
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	676	751
退職給付に係る負債	922	984
退職給付に係る資産	246	233
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	676	751

(4) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度149百万円 当連結会計年度156百万円

4. 確定拠出制度

当社及び国内連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度167百万円、当連結会計年度161百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
販売費及び一般管理費	33	22

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	2010年 ストック・オプション	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション
決議年月日	2010年7月27日	2011年7月27日	2012年7月26日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 13名	当社取締役 12名	当社取締役 11名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)1.	普通株式 29,000株	普通株式 33,700株	普通株式 42,200株
付与日	2010年8月26日	2011年8月25日	2012年8月28日
権利確定条件	新株予約権の付与日において、当社の取締役の地位にあることを要する。なお、対象勤務期間の内に退任することとなった場合には、当該期間開始日より退任日までに見合うストック・オプションについて権利が確定する。	同左	同左
対象勤務期間	付与日(2010年8月26日)から当社の第74期定時株主総会の日まで	付与日(2011年8月25日)から当社の第75期定時株主総会の日まで	付与日(2012年8月28日)から当社の第76期定時株主総会の日まで
権利行使期間 (注)2.	自 2010年8月27日 至 2045年8月25日	自 2011年8月26日 至 2046年8月24日	自 2012年8月29日 至 2047年8月27日
新株予約権の数(個) (注)2.	25	60	80
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び株式数 (注)2.	普通株式 2,500株	普通株式 6,000株	普通株式 8,000株
新株予約権の行使時の払込金額(円)(注)2.	1(注)3.	同左	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円) (注)2.	発行価格 545 資本組入額 273	発行価格 811 資本組入額 406	発行価格 813 資本組入額 407
新株予約権の行使の条件 (注)2.	(注)4.	同左	同左
新株予約権の譲渡に関する事項(注)2.	新株予約権を譲渡するには、当社取締役会の承認を要する。	同左	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項 (注)2.	(注)5.	同左	同左

	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション
決議年月日	2013年7月31日	2014年7月31日	2015年7月31日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 10名	当社取締役 9名	当社取締役 7名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)1.	普通株式 24,000株	普通株式 24,500株	普通株式 13,100株
付与日	2013年8月28日	2014年8月27日	2015年8月27日
権利確定条件	新株予約権の付与日において、当社の取締役の地位にあることを要する。なお、対象勤務期間の内に退任することとなった場合には、当該期間開始日より退任日までに見合うストック・オプションについて権利が確定する。	同左	同左
対象勤務期間	付与日(2013年8月28日)から当社の第77期定時株主総会の日まで	付与日(2014年8月27日)から当社の第78期定時株主総会の日まで	付与日(2015年8月27日)から当社の第79期定時株主総会の日まで
権利行使期間 (注)2.	自 2013年8月29日 至 2048年8月27日	自 2014年8月28日 至 2049年8月26日	自 2015年8月28日 至 2050年8月26日
新株予約権の数(個) (注)2.	53	79	88
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び株式数 (注)2.	普通株式 5,300株	普通株式 7,900株	普通株式 8,800株
新株予約権の行使時の払込金額(円)(注)2.	1(注)3.	同左	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円) (注)2.	発行価格 1,224 資本組入額 612	発行価格 911 資本組入額 456	発行価格 1,441 資本組入額 721
新株予約権の行使の条件 (注)2.	(注)4.	同左	同左
新株予約権の譲渡に関する事項(注)2.	新株予約権を譲渡するには、当社取締役会の承認を要する。	同左	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項 (注)2.	(注)5.	同左	同左

	2016年 ストック・オプション	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
決議年月日	2016年7月28日	2017年7月28日	2018年7月31日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 9名	当社取締役 8名	当社取締役 7名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)1.	普通株式 25,100株	普通株式 9,300株	普通株式 7,600株
付与日	2016年8月25日	2017年8月25日	2018年8月29日
権利確定条件	新株予約権の付与日において、当社の取締役の地位にあることを要する。なお、対象勤務期間の内に退任することとなった場合には、当該期間開始日より退任日までに見合うストック・オプションについて権利が確定する。	同左	同左
対象勤務期間	付与日(2016年8月25日)から当社の第80期定時株主総会の日まで	付与日(2017年8月25日)から当社の第81期定時株主総会の日まで	付与日(2018年8月29日)から当社の第82期定時株主総会の日まで
権利行使期間 (注)2.	自 2016年8月26日 至 2051年8月24日	自 2017年8月26日 至 2052年8月24日	自 2018年8月30日 至 2053年8月28日
新株予約権の数(個) (注)2.	185	82	76
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び株式数 (注)2.	普通株式 18,500株	普通株式 8,200株	普通株式 7,600株
新株予約権の行使時の払込金額(円)(注)2.	1(注)3.	同左	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円) (注)2.	発行価格 1,588 資本組入額 794	発行価格 3,474 資本組入額 1,737	発行価格 2,616 資本組入額 1,308
新株予約権の行使の条件 (注)2.	(注)4.	同左	同左
新株予約権の譲渡に関する事項(注)2.	新株予約権を譲渡するには、当社取締役会の承認を要する。	同左	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項 (注)2.	(注)5.	同左	同左

(注)1. 株式数に換算して記載しております。

2. 当連結会計年度末における内容を記載しております。なお、有価証券報告書提出日の属する月の前月末

(2019年5月31日)現在において、これらの事項に変更はありません。

3. 各新株予約権の行使に際してする出資の目的は金銭とし、その価額は、新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式1株当たりの払込金額を1円とし、これに各新株予約権の目的たる株式の数に乗じた金額とする。

4. 新株予約権の行使の条件

(1) 新株予約権者は、当社の取締役の地位を喪失した日の翌日(以下「権利行使開始日」という。)から当該権利行使開始日より10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を一括してのみ行使できる。

(2) 新株予約権者が死亡した場合、その相続人(新株予約権者の配偶者、子、1親等の直系尊属に限る。)は新株予約権者が死亡した日の翌日から3ヵ月を経過する日までの間に限り新株予約権を行使することができる。

(3) その他の権利行使の条件は、取締役会決議に基づき、当社と新株予約権者との間で締結する新株予約権割当契約書にて定めるものとする。

5. 組織再編成を実施する際の取扱い

組織再編成に際して定める契約書又は計画書等に以下に定める株式会社の新株予約権を交付する旨を定めた場合には、当該組織再編成の比率に応じて、以下に定める株式会社の新株予約権を交付するものとする。

(1) 合併（当社が消滅する場合に限る。）

合併後存続する株式会社又は合併により設立する株式会社

(2) 吸収分割

吸収分割をする株式会社がその事業に関して有する権利義務の全部又は一部を承継する株式会社

(3) 新設分割

新設分割により設立する株式会社

(4) 株式交換

株式交換をする株式会社の発行済株式の全部を取得する株式会社

(5) 株式移転

株式移転により設立する株式会社

(追加情報)

「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況 ストックオプション制度の内容」に記載すべき事項をストック・オプション等関係注記に記載しております。

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度（2019年3月期）において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

ストック・オプションの数

	2010年 ストック・オプション	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション
権利確定前 (株)			
前連結会計年度末	-	-	-
付与	-	-	-
失効	-	-	-
権利確定	-	-	-
未確定残	-	-	-
権利確定後 (株)			
前連結会計年度末	2,500	6,000	8,000
権利確定	-	-	-
権利行使	-	-	-
失効	-	-	-
未行使残	2,500	6,000	8,000

	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション
権利確定前 (株)			
前連結会計年度末	-	-	-
付与	-	-	-
失効	-	-	-
権利確定	-	-	-
未確定残	-	-	-
権利確定後 (株)			
前連結会計年度末	6,400	9,900	10,700
権利確定	-	-	-
権利行使	1,100	2,000	1,900
失効	-	-	-
未行使残	5,300	7,900	8,800

	2016年 ストック・オプション	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
権利確定前 (株)			
前連結会計年度末	-	-	-
付与	-	-	7,600
失効	-	-	-
権利確定	-	-	7,600
未確定残	-	-	-
権利確定後 (株)			
前連結会計年度末	21,300	9,300	-
権利確定	-	-	7,600
権利行使	2,800	1,100	-
失効	-	-	-
未行使残	18,500	8,200	7,600

単価情報

	2010年 ストック・オプション	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション
権利行使価格 (円)	1	1	1
行使時平均株価 (円)	-	-	-
付与日における公正な評価単価 (円)	544	810	812

	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション
権利行使価格 (円)	1	1	1
行使時平均株価 (円)	4,200	4,200	4,200
付与日における公正な評価単価 (円)	1,223	910	1,440

	2016年 ストック・オプション	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・1オプション
権利行使価格 (円)	1	1	1
行使時平均株価 (円)	4,200	4,200	-
付与日における公正な評価単価 (円)	1,587	3,473	2,615

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与された2018年ストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下のとおりであります。

(1) 使用した評価技法 配当修正型ブラック・ショールズ式

(2) 主な基礎数値及び見積方法

	2018年 ストック・オプション
株価変動性(注)1	35.7%
予想残存期間(注)2	9.0年
予想配当(注)3	61円/株
無リスク利率(注)4	0.04%

(注)1. 9年0ヵ月間(2009年8月から2018年8月まで)の株価実績に基づき算定しております。

2. 過去の取締役の平均在任期間に基づいて見積っております。

3. 2018年3月期の配当実績によっております。

4. 予想残存期間に対応する期間に対応する国債の利回りであります。

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
製品保証引当金	561百万円	535百万円
たな卸資産評価差額	311	287
未実現利益消去に伴う税効果調整額	339	392
賞与引当金	416	431
退職給付に係る負債	549	547
減損損失	533	504
繰越欠損金(注)	3,641	2,787
減価償却費	441	437
その他	536	659
繰延税金資産小計	7,330	6,583
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	-	1,785
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	-	816
評価性引当額小計	3,514	2,602
繰延税金資産合計	3,815	3,981
繰延税金負債		
退職給付に係る資産	75	70
圧縮記帳積立金	17	17
連結子会社の時価評価差額	705	710
その他有価証券評価差額金	1,079	906
減価償却費	179	181
その他	16	15
繰延税金負債合計	2,074	1,901
繰延税金資産の純額	1,741	2,079

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠 損金(1)	68	21	61	47	48	2,541	2,787
評価性引当額	66	20	60	45	37	1,554	1,785
繰延税金資産	1	0	0	1	10	987	1,002

(1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(2) 税務上の繰越欠損金2,787百万円(法定実効税率を乗じた額)について、繰延税金資産1,002百万円を計上しております。当該繰延税金資産1,002百万円は、連結子会社Nichia USA, Inc.における税務上の繰越欠損金の残高2,511百万円(法定実効税率を乗じた額)の一部について認識したものであります。当該繰延税金資産を計上した税務上の繰越欠損金は、当該連結子会社における新工場建設計画も考慮して算出した将来の課税所得の見込みにより回収可能と判断し、評価性引当額を認識しておりません。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった
 主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.7%	30.4%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.5
住民税均等割	0.6	0.7
評価性引当額の増減	15.2	7.0
試験研究費等の特別税額控除	0.7	1.2
海外子会社税率差異	1.7	1.3
税率変更による影響	4.3	0.0
その他	1.2	1.6
税効果会計適用後の法人税等の負担率	17.2	23.7

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち、分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は外装材事業を中心に事業活動を展開しており、業種別に区分された事業ごとに、当社及び当社の連結子会社（以下、事業運営会社）が各々独立した経営単位として、単一の事業に従事する経営スタイルを採用しております。

従って、当社グループは、事業運営会社を基礎とした業種別のセグメントから構成されており、「外装材事業」を報告セグメントとしております。

「外装材事業」は窯業系及び金属系外装材並びに同関連製品、外装用付属部材等の製造・販売をしておりません。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載の方法と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント	その他 (注1)	合計	調整額 (注2・4)	連結財務諸表計 上額(注3)
	外装材事業				
売上高					
外部顧客への売上高	105,852	10,291	116,144	-	116,144
セグメント間の内部売上高又は振替高	876	2,220	3,096	3,096	-
計	106,729	12,511	119,241	3,096	116,144
セグメント利益又は損失()	16,004	226	16,230	2,998	13,232
セグメント資産	94,987	7,350	102,338	27,267	129,605
その他の項目					
減価償却費	4,734	178	4,913	576	5,489
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,780	169	2,949	255	3,205

- (注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、繊維板事業、工事業、FP事業、その他事業を含んでおります。
2. セグメント利益又は損失の調整額 2,998百万円には、各報告セグメントに配分していない全社費用 3,061百万円及びその他の調整額62百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない当社の総務部門等管理部門に係る費用であります。
3. セグメント利益又は損失は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。
4. セグメント資産の調整額27,267百万円には、各報告セグメントに配分していない全社資産28,181百万円及びその他の調整額 914百万円が含まれております。
5. 減価償却費並びに有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却額が含まれております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他 (注1)	合計	調整額 (注2・4)	連結財務諸表計 上額(注3)
	外装材事業				
売上高					
外部顧客への売上高	108,790	10,369	119,160	-	119,160
セグメント間の内部売上高又 は振替高	840	2,369	3,209	3,209	-
計	109,630	12,738	122,369	3,209	119,160
セグメント利益又は損失()	15,256	394	15,650	2,930	12,720
セグメント資産	99,894	7,751	107,646	28,422	136,068
その他の項目					
減価償却費	4,103	151	4,254	591	4,846
有形固定資産及び無形固定資 産の増加額	3,398	179	3,578	295	3,873

- (注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、繊維板事業、工事業、FP事業、その他事業を含んでおります。
2. セグメント利益又は損失の調整額 2,930百万円には、各報告セグメントに配分していない全社費用 2,982百万円及びその他の調整額52百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない当社の総務部門等管理部門に係る費用であります。
3. セグメント利益又は損失は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。
4. セグメント資産の調整額28,422百万円には、各報告セグメントに配分していない全社資産29,094百万円及びその他の調整額 671百万円が含まれております。
5. 減価償却費並びに有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却額が含まれております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	米国	その他	合計
100,688	13,627	1,828	116,144

（注）売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

（単位：百万円）

日本	米国	その他	合計
37,973	4,507	1,782	44,262

3．主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
SMB建材（株）	30,777	外装材事業
住友林業（株）	26,708	外装材事業
伊藤忠建材（株）	12,581	外装材事業

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	米国	その他	合計
102,042	14,981	2,136	119,160

（注）売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

（単位：百万円）

日本	米国	その他	合計
37,412	4,411	1,542	43,366

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
SMB建材(株)	31,212	外装材事業
住友林業(株)	27,135	外装材事業
伊藤忠建材(株)	13,875	外装材事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	外装材事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	-	147	-	147

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	2,189.71円	2,374.08円
1株当たり当期純利益	301.60円	268.13円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	301.01円	267.61円

(注) 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	11,151	9,915
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	11,151	9,915
期中平均株式数(千株)	36,974	36,981
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (百万円)	-	-
普通株式増加数(千株)	72	71
(うち新株予約権(千株))	(72)	(71)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当 たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概 要		

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】
 【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	280	210	0.91	
1年以内に返済予定の長期借入金	5,064	2,553	0.92	
1年以内に返済予定のリース債務	129	116	-	
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	12,969	13,416	0.77	2020年～2025年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	129	239	-	2020年～2025年
合計	18,573	16,535	-	

(注) 1. 「平均利率」については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

なお、リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、「平均利率」の記載を省略しております。

2. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年以内における1年ごとの返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	1,489	888	2,111	2,928
リース債務	99	73	56	7

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	27,742	56,570	89,322	119,160
税金等調整前四半期(当期) 純利益(百万円)	2,473	5,705	9,852	13,073
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益(百万円)	1,830	4,202	7,298	9,915
1株当たり四半期(当期) 純利益(円)	49.51	113.63	197.35	268.13

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	49.51	64.11	83.71	70.78

訴訟

当社は、この有価証券報告書提出日現在において、国及び当社を含む石綿含有建材製造販売企業10～40数社を被告として、いずれも建設作業などに従事してアスベスト関連疾患に罹患したとする者など合計522名の原告から、国に対しては国家賠償法に定める国家賠償責任に基づき、石綿含有建材製造販売企業に対しては民法に定める不法行為責任又は製造物責任法に定める製造物責任に基づき、合計9訴訟で総額168億円の損害賠償を求める訴訟(建設アスベスト損害賠償請求訴訟)の提起を受けております。

このうち、大阪高等裁判所に係属していた訴訟(5名の原告、訴額1億54百万円)について2018年9月20日に判決が言い渡され、原告らの当社に対する請求は棄却されました。

当社といたしましては、原告らからの請求に対し、今後も法廷の場において適切に対応していく所存です。

なお、現時点において、当社の業績に与える影響は不明です。

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	18,209	20,171
受取手形	4 53	4 83
電子記録債権	4 4,006	4 3,791
売掛金	2 23,062	2 25,691
商品及び製品	8,559	9,376
仕掛品	964	1,181
原材料及び貯蔵品	1,366	1,411
前払費用	2 306	2 277
未収入金	2 1,616	2 1,787
短期貸付金	2 3,264	2 2,958
その他	2 14	2 74
貸倒引当金	24	26
流動資産合計	61,400	66,779
固定資産		
有形固定資産		
建物	1 4,578	1 4,334
構築物	1 536	1 517
機械及び装置	1 3,706	1 3,472
車両運搬具	57	69
工具、器具及び備品	1 215	1 175
土地	1 11,580	1 11,580
リース資産	175	247
建設仮勘定	50	22
有形固定資産合計	20,899	20,419
無形固定資産		
借地権	11	11
ソフトウェア	1,693	1,259
リース資産	11	21
電話加入権	28	28
施設利用権	0	-
その他	-	15
無形固定資産合計	1,744	1,336
投資その他の資産		
投資有価証券	6,149	5,581
関係会社株式	12,086	12,086
関係会社出資金	3,428	3,436
長期貸付金	2 3,621	2 3,271
長期前払費用	79	24
繰延税金資産	484	626
敷金及び保証金	2 408	2 405
投資不動産	674	672
その他	2 89	2 89
貸倒引当金	1,209	1,122
投資その他の資産合計	25,812	25,071
固定資産合計	48,456	46,827
資産合計	109,856	113,606

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	4,734	4,718
買掛金	2,19,412	2,20,785
短期借入金	2,3,810	2,4,450
1年内返済予定の長期借入金	5,016	2,548
リース債務	114	97
未払金	2,852	2,1,441
未払費用	2,5,120	2,5,499
未払法人税等	1,211	1,138
預り金	146	144
賞与引当金	823	821
役員賞与引当金	100	90
製品保証引当金	486	593
設備関係支払手形	4,25	4,9
その他	2,34	18
流動負債合計	37,888	38,355
固定負債		
長期借入金	12,964	13,416
リース債務	87	192
退職給付引当金	0	159
役員退職慰労引当金	32	39
製品保証引当金	1,349	1,154
その他	2,70	2,70
固定負債合計	14,504	15,032
負債合計	52,392	53,388
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,136	8,136
資本剰余金		
資本準備金	11,122	11,122
その他資本剰余金	2	7
資本剰余金合計	11,125	11,130
利益剰余金		
利益準備金	768	768
その他利益剰余金		
別途積立金	16,160	16,160
繰越利益剰余金	19,006	22,138
利益剰余金合計	35,935	39,067
自己株式	326	319
株主資本合計	54,869	58,014
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	2,490	2,091
評価・換算差額等合計	2,490	2,091
新株予約権	103	112
純資産合計	57,463	60,218
負債純資産合計	109,856	113,606

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	1 97,357	1 100,121
売上原価	1 63,541	1 65,483
売上総利益	33,816	34,638
販売費及び一般管理費	2 26,871	2 27,989
営業利益	6,944	6,648
営業外収益		
受取利息	1 55	1 61
受取配当金	1 709	1 628
不動産賃貸料	1 157	1 148
為替差益	-	58
その他	1 287	1 241
営業外収益合計	1,210	1,139
営業外費用		
支払利息	1 172	1 154
不動産賃貸原価	47	45
為替差損	58	-
その他	13	5
営業外費用合計	292	205
経常利益	7,862	7,581
特別利益		
固定資産売却益	3 2	3 4
特別利益合計	2	4
特別損失		
固定資産除却損	4 38	4 48
関係会社株式評価損	247	-
その他	0	-
特別損失合計	285	48
税引前当期純利益	7,579	7,538
法人税、住民税及び事業税	2,147	2,104
法人税等調整額	45	27
法人税等合計	2,192	2,131
当期純利益	5,386	5,406

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金					
		資本準備金	その他資本剰余金	利益準備金	その他利益剰余金				
					別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	8,136	11,122	-	768	16,160	15,782	325	51,645	
当期変動額									
剰余金の配当						2,162		2,162	
当期純利益						5,386		5,386	
自己株式の取得							4	4	
自己株式の処分			2				2	5	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	2	-	-	3,223	1	3,224	
当期末残高	8,136	11,122	2	768	16,160	19,006	326	54,869	

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	1,939	1,939	75	53,660
当期変動額				
剰余金の配当				2,162
当期純利益				5,386
自己株式の取得				4
自己株式の処分				5
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	551	551	27	579
当期変動額合計	551	551	27	3,803
当期末残高	2,490	2,490	103	57,463

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金					
		資本準備金	その他資本剰余金	利益準備金	その他利益剰余金				
					別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	8,136	11,122	2	768	16,160	19,006	326	54,869	
当期変動額									
剰余金の配当						2,274		2,274	
当期純利益						5,406		5,406	
自己株式の取得							1	1	
自己株式の処分			5				8	14	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	5	-	-	3,132	6	3,145	
当期末残高	8,136	11,122	7	768	16,160	22,138	319	58,014	

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	2,490	2,490	103	57,463
当期変動額				
剰余金の配当				2,274
当期純利益				5,406
自己株式の取得				1
自己株式の処分				14
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	398	398	8	390
当期変動額合計	398	398	8	2,754
当期末残高	2,091	2,091	112	60,218

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

・子会社株式及び関連会社株式

総平均法による原価法

・その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定)

時価のないもの

総平均法による原価法

(2) デリバティブ

時価法

(3) 商品及び製品、仕掛品

総平均法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(4) 原材料及び貯蔵品

主として移動平均法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法

(3) リース資産

定額法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする方法によっております。

(4) 長期前払費用

定額法

なお、償却期間については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員への賞与の支払いに備えるため、将来の支給見込額のうち当期の負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員への賞与の支払いに備えるため、当事業年度における支給見込額に基づき計上しております。

(4) 製品保証引当金

製品保証費用の支払いに備えるため、過去の発生実績率に基づいて計算した額に、発生した製品保証費用の実情を考慮した保証費発生見積額を加えて計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(14年)による定率法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(6) 役員退職慰労引当金

執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

4. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

主として繰延ヘッジ処理を採用しております。また、為替変動リスクのヘッジについて振当処理の要件を満たしている場合には振当処理を、金利スワップについて特例処理の条件を満たしている場合には特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。

- a.ヘッジ手段.....為替予約
ヘッジ対象.....外貨建金銭債権債務
- b.ヘッジ手段.....金利スワップ
ヘッジ対象.....借入金

(3) ヘッジ方針

為替変動による外貨建金銭債権債務の損失可能性及び金利変動による借入債務の損失可能性を減殺する目的で行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段とヘッジ対象の資産・負債に関する重要な条件が同一であり、かつヘッジ開始時及びその後も継続して、相場変動又はキャッシュ・フロー変動を完全に相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」632百万円は、「固定負債」の「繰延税金負債」147百万円と相殺して、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」484百万円として表示しており、変更前と比べて総資産が147百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(会計上の見積りの変更)

(退職給付に係る会計処理の数理計算上の差異の費用処理年数の変更)

退職給付に係る会計処理の数理計算上の差異の費用処理年数について、従来、従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(主として15年)で費用処理しておりましたが、平均残存勤務期間がこれを下回ったため、当事業年度より費用処理年数を主として14年に変更しております。

なお、当該変更に伴う損益に与える影響額は軽微であります。

(貸借対照表関係)

1 圧縮記帳

国庫補助金等の受入により、取得価額から控除した圧縮記帳累計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
建物	46百万円	46百万円
構築物	0	0
機械及び装置	327	327
工具、器具及び備品	8	8
土地	100	100
計	483	483

2 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	7,072百万円	7,877百万円
長期金銭債権	3,653	3,305
短期金銭債務	11,640	13,164
長期金銭債務	47	47

3 保証債務

次の関係会社について、金融機関からの借入等に対し債務保証を行っております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
株式会社F Pコーポレーション	280百万円	株式会社F Pコーポレーション 210百万円
ニチハマテックス株式会社	32	Nichiha USA, Inc. 0
Nichiha USA, Inc.	0	
計	312	計 210

4 期末日満期手形等

期末日満期手形等の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形等が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	4百万円	6百万円
電子記録債権	235	217
支払手形	4	4
設備関係支払手形	6	1

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	3,617百万円	5,099百万円
仕入高	24,272	26,410
営業取引以外の取引による取引高	814	759

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度49%、当事業年度49%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度51%、当事業年度51%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
運賃及び荷造費	12,885百万円	13,720百万円
給料及び賞与	3,989	3,981
賞与引当金繰入額	365	364
役員賞与引当金繰入額	100	90
役員退職慰労引当金繰入額	9	12
減価償却費	736	760
製品保証引当金繰入額	267	397

3 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
機械及び装置	1百万円	-百万円
車両運搬具	1	4
計	2	4

4 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物	1百万円	2百万円
構築物	0	-
機械及び装置	10	26
工具、器具及び備品	0	0
その他	25	19
計	38	48

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式12,086百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式12,086百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
製品保証引当金	560百万円	535百万円
たな卸資産評価差額	92	73
賞与引当金	250	251
退職給付引当金	85	103
減価償却費	382	380
その他	166	164
繰延税金資産合計	1,537	1,509
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	1,052	882
繰延税金負債合計	1,052	882
繰延税金資産の純額	484	626

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.7%	30.4%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.7	0.6
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	2.4	2.0
住民税均等割	0.8	0.8
試験研究費等の特別税額控除	1.2	1.3
その他	0.3	0.2
税効果会計適用後の法人税等の負担率	28.9	28.3

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産						
建物	4,578	113	2	356	4,334	15,128
構築物	536	34	-	53	517	2,405
機械及び装置	3,706	1,081	26	1,287	3,472	55,427
車両運搬具	57	60	0	48	69	379
工具、器具及び備品	215	82	0	122	175	3,659
土地	11,580	-	-	-	11,580	-
リース資産	175	178	-	106	247	158
建設仮勘定	50	1,347	1,376	-	22	-
有形固定資産計	20,899	2,899	1,405	1,974	20,419	77,160
無形固定資産						
借地権	11	-	-	-	11	-
ソフトウェア	1,693	30	-	463	1,259	1,875
リース資産	11	18	-	9	21	19
電話加入権	28	-	-	-	28	-
施設利用権	0	-	-	0	-	70
その他	-	45	30	0	15	0
無形固定資産計	1,744	95	30	472	1,336	1,964

(注) 1. 当期増加額の主な内訳は次のとおりであります。

機械及び装置	名古屋工場	窯業系外装材生産設備	469百万円
	いわき工場	窯業系外装材生産設備	359百万円
	下関工場	窯業系外装材生産設備	185百万円
建設仮勘定	当期中に各資産科目へ振替えられたものを含んでおり、主なものは上記のとおりであります。なお、その振替額は当期減少額に含まれております。		

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	1,234	1	88	1,148
賞与引当金	823	821	823	821
役員賞与引当金	100	90	100	90
製品保証引当金	1,835	397	484	1,748
役員退職慰労引当金	32	12	5	39

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

訴訟

訴訟の状況につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (2) その他 訴訟」に記載のとおりであります。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・売渡し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・売渡手数料	(特別口座) 名古屋市中区栄三丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 無料
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL http://www.nichiha-ir.com/index.html
株主に対する特典	該当事項なし

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、株主の有する株式数に応じた募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | |
|-----------------------------------|----------------|-------------------------------|--------------------------|
| (1) 有価証券報告書
及びその添付書類
並びに確認書 | 事業年度
(第81期) | 自 2017年4月1日
至 2018年3月31日 | 2018年6月26日
関東財務局長に提出 |
| (2) 内部統制報告書
及びその添付書類 | | | 2018年6月26日
関東財務局長に提出 |
| (3) 四半期報告書及び確認書 | (第82期第1四半期) | 自 2018年4月1日
至 2018年6月30日 | 2018年8月9日
関東財務局長に提出 |
| | (第82期第2四半期) | 自 2018年7月1日
至 2018年9月30日 | 2018年11月13日
関東財務局長に提出 |
| | (第82期第3四半期) | 自 2018年10月1日
至 2018年12月31日 | 2019年2月13日
関東財務局長に提出 |
| (4) 臨時報告書 | | | 2018年6月29日
関東財務局長に提出 |

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月25日

二チ八株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 鈴木 賢次 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 稲垣 吉登 印
業務執行社員

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている二チ八株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益及び包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、二チ八株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、ニチ八株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、ニチ八株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。

2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年 6月25日

二チ八株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 鈴木 賢次 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 稲垣 吉登 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている二チ八株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第82期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、二チ八株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。